

比較文化論

No.35

日本比較文化学会第39回全国大会
2017年度日本比較文化学会国際学術大会
発表抄録

於 静岡県立大学

2017年5月20日(土)

日本比較文化学会

The Japan Association of Comparative Culture

(共催)

静岡県立大学 淡江大学日本語学科

台湾日本語教育学会

(海外提携学会)

韓国日本文化学会 台湾日本語文学会

日本比較文化学会第39回全国大会 2017年度日本比較文化学会国際学術大会

日時：2017年5月20日（土）

会場：静岡県立大学大講堂（受付・総会・シンポジウム）・国際関係学部棟（研究発表）・
経営情報学部棟（特別講演）

9:15 受付開始 大講堂
8:45～9:40 理事会 小講堂
9:45～10:05 総会 大講堂
10:05～10:15 台湾日本語教育学会との学術交流協定締結式 大講堂
淡江大学村上春樹研究センターとの学術交流協定締結式 大講堂
10:20～12:10 シンポジウム 「比較文化の今日的意義」 大講堂
※各パネリストの発表時間は15分です。

司会 木田悟史（三重大学）

パネリスト（台湾日本語文学会） 頼振南（同学会理事長・台湾輔仁大学）

パネリスト（東北支部・関東支部） 横山由香（元韓国仁川大学校）

パネリスト（中部支部・関西支部） 河瀬彰宏（同志社大学）

パネリスト（中四国支部・九州支部） 落合由治（台湾淡江大学）

12:10～13:15 昼食：はばたき棟の食堂が営業しています。

（理事の昼食会場ははばたき棟第3会議室）

13:15～16:50 研究発表 国際関係学部棟

研究発表会場には、研究発表用の機器が設置されており、パワーポイントなどの使用が可能です。ハンドアウトは20部ご用意いたします。

第1会場 3107 教室 ・ 第2会場 3108 教室
第3会場 3110 教室 ・ 第4会場 3215 教室
第5会場 3219 教室 ・ 第6会場 3313 教室
第7会場 3314 教室 ・ 第8会場 3315 教室
第9会場 3316 教室 ・ 第10会場 3317 教室

17:00～18:00 特別講演 経営情報学部棟 4111 教室

講師：鈴木将仁（NPO 法人今川さん製作委員会理事長・静岡漫画研究所代表）

演題：今川義元の漫画で地域おこし（仮題）

司会：澤田敬人（静岡県立大学）

18:30～20:00 懇親会

会場：学生ホール（大講堂・小講堂の横の建物です。）

会費：一般会員 5,500 円、大学院生 4,500 円

準備の都合がありますので、お手数ですが、ご参加いただける方は4月28日（金）までに会費を以下の銀行口座にお振り込みくださいますようお願い申し上げます。

【ゆうちょ銀行もしくは郵便局で手続きする場合はこちら】

ゆうちょ総合口座 「記号・番号：12310-340001」

口座名義：日本比較文化学会中部支部

【別の銀行等の金融機関からゆうちょ口座へ振り込む場合はこちら】

銀行名：ゆうちょ銀行 店名：二三八（ニサンハチ） 店番：238

種目：普通預金 口座番号：0034000 口座名義：日本比較文化学会中部支部

【シンポジウム：「比較文化の今日的意義」（会場：大講堂）

（パネリスト発表論題一覧）

10：20～12：10

司会：木田悟史（三重大学）

(1) ことばと文化を乗り越える「人」を創る

—国際医療文化社会への貢献を目指した国際医療翻訳—

頼振南（台湾日本語文学会理事長・台湾輔仁大学教授）

(2) 比較文化の今日的意義

—韓国の日本語教育の現場および日韓の比較研究において—

横山由香（元韓国仁川大学校客員教授）

(3) 比較文化研究におけるデジタル・ヒューマニティーズが果たす意義

河瀬彰宏（同志社大学助教）

(4) 多文化共生としての「文化のリアレンジ」

落合由治（台湾淡江大学教授）

【シンポジウム：パネリスト要旨】（会場：大講堂）

ことばと文化を乗り越える「人」を創る —国際医療文化社会への貢献を目指した国際医療翻訳—

頼 振南（台湾日本語文学会理事長／台湾輔仁大学外国語学部長／日本語文学科教授）

2016年7月13日に平成28年度日本外務大臣表彰の受賞団体と個人が発表された。台湾日本語文学会は、台湾における日本語文学研究及び日本語教育の発展に対する貢献を評価され表彰された。約25年間の学会活動は、ひとつの仕事として、まさに、台湾という場所で、「日本とはなにか」ということを人文系の学問によって考える責任の一部を負っていたのではないかと、ということである。今後とも研究発表、国際シンポジウムを通して、日本、および世界での日本語・日本文学・日本文化を通しての学術的交流をこれまで以上に活発に行い、研究の成果の発信と受信をしながら、世界のなかで「日本とは」、そして「日本とはと問う台湾とは」という問いを繰り返す、時代や世界を考えていく責任を実感している。

さて、この「日本とは」「『日本とは』と問う台湾とはなにか」という問いを考えたときに、その答え（もちろんこの「答え」はひとつではないだろう。）を求めるためには、日本語も含めた外国語能力だけに頼るのではなく、言語を使って行動することが求められているのではないかと。国境を越えて人と物が大規模に、そして迅速に移動する「地球社会」が形成されつつある今、コミュニケーションの橋渡しとしての異文化教育を考えたときに、いかにより高度な言語運用能力を持った人を創るかという基盤の上に、その高度な言語運用能力によって専門的な内容を、コミュニケーションをとる相手にいかに効果的に伝えるか、ということが重要になってくるだろう。言語技術だけではなく、また専門知識だけでもない、いかなれば言語運用能力と専門知識の「総合的能力」のある人を育成することが、これからの異文化教育の中に求められるのではないかと、と考えている。

このような考えにいたったのは、発表者の勤務校である輔仁大学がブルー・オーシャン戦略のひとつとして、医療翻訳通訳プログラムを異文化コミュニケーション研究所翻訳学修士課程で実施することに携わったからである。この「医療翻訳通訳プログラム」は、外国語能力に医療知識を融合させ、外国語人材を医療過程に投入することで、国際医療文化社会に進出できる人材養成プログラム活用できる専門が求められている。ことに、場所が「医療」という「生活と生命と係わる現場」「地域医療」という「土地にかかわる現場」という人間の存在の根源と深くかかわる場所であることは軽視できない。その場に「通訳翻訳」という、患者にとって「異なったもの」が入り込むことでしか、患者自身の命（＝存在）を救うことができないからである。患者として通訳を介してしか医療を受けられない場に臨んだ場合、通訳者の行動や行為は患者と共感できるスイッチをもっていることが望ましい。また、通訳者がその共感能力を持たないまま医療の現場に立ち行動するのならば「橋渡し役」は人間である必要もなからう。このスイッチの育成をどうするか。これこそ、比較文化の研究成果が負えるものではないだろうか。比較文化の今日的意義として、今私が考えるように、研究成果を異文化教育の中に還元していき、そして現場で生かし、行動できる人を創っていくことがあるだろう。いささか現場に偏った話になってしまったが、比較文化の今日的意義として提示したい。

ただし、医療の現場ではまだこの翻訳・通訳者の「スイッチ」の重要性が認識されておらず、言語能力と知識があれば現場での「橋渡し」ができると考えられがちである。そのため砂を噛むような思いをすることもあるが、日本文化研究の責任を担う人間として、比較文化研究の成果を教育の現場、医療の現場に還元する方法を模索しながら、文化こそがさまざまな医療や技術の基礎力になっていることも伝えていきたいと思っている。

【シンポジウム：パネリスト要旨】（会場：大講堂）

比較文化の今日的意義

—韓国日本語教育の現場および日韓の比較研究において—

横山由香（元韓国仁川大学校客員教授）

日本と韓国は、長い間「近くて遠い国」であったが、1998年に韓国で日本の大衆文化が開放され、2000年代初頭からは日本で韓国の大衆文化が流行したことにより、文化面から「近くて近い国」へと変わっていった。近年、政治的な問題等から再びその距離が遠くなっている日本と韓国であるが、本発表では両国の文化を比較する今日的意義について、教育と研究という2つの側面から検討を行う。

発表者は韓国の大学で数年間、日本語教育に携わってきたが、その際に日本の「文化」について何をどのように教えるべきか頭を悩ませた。日本語のテキストの多くは日本の「伝統文化」を扱っている。しかし、実際に日本を訪れたり、日本人と直接交流したりする機会が増えた今日の日本語学習者に対しては、従来と異なる文化教育を行う必要性を感じたからである。また、これまでは、「日本の文化はこうである」「日本人はこのような場面でこのように振る舞う」というように、ステレオタイプ的な知識を植え付けるような文化教育が多くなされてきたが、今後は、何がどのように違うのか（同じなのか）ということ学習者自らが考え、自国の文化との相違点および共通点を探る比較文化の視点を養う教育方法が望ましいといえよう。

研究の側面においては、これまで日韓両国の大学生を中心とした若者の対人関係や対人行動、および対人意識を比較するための質問紙調査を行ってきた。その結果、韓国では「친구^{チング}（友達）」などの近しい関係であれば多少のことは許されるという先行研究の指摘とは異なり、韓国人（特に女性）は、たとえ「친구^{チング}」であっても、相手の不快な言動に対して許容度が低い傾向が見られた。また、補足的に行ったインタビュー調査の結果からも、社会的変化などの要因による対人関係のあり方の変化が窺える結果となった。このように、同じ国の中であっても、時代によって人の生き様、価値観、他者との関係性などは変化していく。従って、各時代の「文化」が時の流れの中で風化したり、忘れ去られたりしてしまわぬよう、調査等を継続的に行い、その結果を研究結果として随時残していかなければならない。また、その際、ひとつの文化を縦切りにしてその変遷を追うだけでなく、横切りにして同じ時代の他国の文化と比較することによって、自国の文化の特徴や在り方がより鮮明に、かつ客観的に見えてくると考えられる。

文化は歴史や伝統の中にある固定されたものではなく、時代の流れと共に変化していくものである。確かにその時代、そのような文化があったということを記録に残すためにも、研究者らは今日、そしてこれからも文化を研究し続ける必要がある。

【シンポジウム：パネリスト要旨】（会場：大講堂）

比較文化研究におけるデジタル・ヒューマニティーズが果たす意義

河瀬彰宏（同志社大学助教）

はたして、文化現象——人々が共有する行動様式・生活様式——には法則があるのだろうか。もし、法則があるとすれば、文化現象を科学的に分析し、文化間に隠された特徴の発見や文化の発展・衰退の予測に役立つ知見が得られるはずである。しかし、どのような方法論を用いればよいのだろうか。本シンポジウムでは、この問いを検討しながら、世界的なトレンドとなりつつあるデジタル・ヒューマニティーズ (Digital Humanities) ——人文科学の対象に情報学と統計学の方法論を導入する分野——が比較文化研究に果たす意義を共有したい。

学問の方法論は、大きく定性的研究と定量的研究に分けることができる。定性的研究は、対象の観察と性質を記述することで理解を深めていく方法論であり、神学、哲学、芸術学、文学などの人文科学 (humanities) 諸分野で広く利用されている。定量的研究とは、対象の計測によって仕組みを明らかにする方法論であり、物理学、天文学、医学、数学などの自然科学 (science) 諸分野で利用されている。

社会や人間の行動様式から形成される文化現象は、その内部にどのような因果関係や論理が内在しているのかを直接掴むことができないため、長らく定性的研究の対象として扱われてきた。例えば、伝統的かつ正統的な方法論を重んじる音楽学者は、自身の研究対象について文献調査や実地調査を複合した定性的研究を通じて、音楽文化の実態解明を目指す。しかし、定性的研究には、科学にとって重要な再現可能性 (reproducibility) ——第三者が同様のアプローチを通じて誤差の範囲内で同様の結果を得られること——や、反証可能性 (falsifiability) ——第三者が同じ内容を検証してフェアに議論できる場を設けること——を担保しにくい問題がある。換言すれば、定性的研究は、分析過程に恣意性や主観的判断が多分に含まれてしまう問題がある。例えば、評価者の知識量・価値観・理解力に差があれば、同じ事象であっても異なる様相——美醜・善悪・優劣の評価——として伝聞されてしまう可能性がある。

この問題を解決する方針として、定性的研究を定量的研究に近づける工夫、すなわち、対象を記号と数量として示し、客観的な立場から議論する仕組みを導入することが選択肢の一つとして考えられる。本シンポジウムでは、従来から定性的研究の射程とされてきた音楽文化の伝播・変遷の問題を具体的な事例として取り上げ、比較文化研究にデジタル・ヒューマニティーズの発想を導入する可能性を紹介していく。

【シンポジウム：パネリスト要旨】（会場：大講堂）

多文化共生としての「文化のリアレンジ」

落合由治（台湾淡江大学教授）

今日のグローバル化社会では様々な国家、社会、民族、地域集団などの多様な関係での接触にともなって浮かぶ相互の歴史的で社会文化的な特徴を異文化交流、異文化理解、国際理解、相互理解、多文化共生などの概念で捉えようとしている。しかし、こうした概念は、社会的にどのようなジャンルでテーマ化されているかによって、取り上げられる対象が大きく変わってくる。たとえば、教育面では、グローバル人材、国際的人材の育成やキャリア形成という課題として、職業、仕事、ビジネス等の面でのスキルと自己形成過程が取り上げられている。日本語教育、英語教育など第二言語教育や習得の課題もそうした中で考察されている。一方、国家間関係の面では、文化外交、文化戦略などの概念で対外的に自国の文化を宣伝、アピールする問題として論じられたり、外交問題、政治的経済的軍事的対立等の関係での課題の解決や失敗の事例や政府、政治家、官僚の動きが研究課題になる。ビジネスや地域行政の中では、対外的にも国内的にも地域文化、地方の文化などの用語で産業やサービスと結びつけた様々な対象が取り上げられている。流行やトレンドの面でみれば、生活、消費、娯楽、教養、レジャーに関わるあらゆる要素が文化として浮かんでくる。

比較文化研究の大切な意義は、このように何らかの基準で自他が区分される人間集団やその境界で、媒介の役割を果たす人間やもの、組織、活動、表現の文字通り多様で多元的な相互関係を対象として可視化していくことにあると言えよう。今日の比較文化の意義は、その点で近代の日本の大学制度が産み出し、認識し、固定させてきた文化や文明の概念を再拡張、再拡大させるとともに、解体、解消して再分化、再分類し、多元化、深化、再結合、再統合化していくことにあるとも言えよう。

今回は具体的事例として表記法、正書法に関する問題を取り上げて、日本、中華圏、欧米圏の近現代の変化を比較して、文化のリアレンジについて多文化共生の視点で考えていきたい。

【研究発表論題】

第1会場：3107教室 《言語習得論・心理言語学・対照言語学研究領域》

(司会：佐藤静 宮城教育大学)

1. 13:15～13:45

言語習得に有効な母語活用の一例—英語原書版と日本語訳書版を使った絵本の「読み聞かせ」

木戸美幸 (京都光華女子大学教授)

2. 13:50～14:20

台湾での日本語作文授業における異文化への気付きの可能性

羅曉勤 (銘傳大学准教授)

3. 14:25～14:55

日本語の授受表現の習得研究—中国人の日本語学習者の誤用分析を例に—

李寰飛 (同志社大学大学院博士前期課程)

休憩 (14:55～15:10)

(司会：近藤俊明 東京未来大学)

4. 15:10～15:40

日中接触場面における感謝表現についての一考察

—学習者の使用実態と使用意識を中心に—

葉倩倩 (同志社大学大学院特別研究生)

5. 15:45～16:15

日本人英語学習者と英語母語話者の発話比較分析

高橋栄作 (高崎経済大学准教授)

6. 16:20～16:50

日本人英語学習者における日本語の転移の生起条件に関する一考察

—英語の文産出における主語・構文の習得に焦点を当てて—

橋尾晋平 (同志社大学大学院博士後期課程)

第2会場：3108教室 ≪世界文学・比較文学・文化研究領域（東洋・西洋）≫①

（司会：金志佳代子 兵庫県立大学）

1. 13:15～13:45

諦めない女性たち

—『田舎ミューズ』『ボヴァリー夫人』『女の一生』『ナナ』を通して—

水町いおり（中京大学非常勤講師）

2. 13:50～14:20

ラフカディオ・ハーンの邦訳研究

—平井呈一訳を再考する—

木田悟史（三重大学特任准教授）

3. 14:25～14:55

異教の神々の跳躍

—ハインリヒ・ハイネと人類解放の夢—

小谷民菜（静岡県立大学准教授）

休憩（14:55～15:10）

（司会：水町いおり 中京大学）

4. 15:10～15:40

19世紀後半から20世紀初頭に語られたバイロンのイメージ

—『チャイルド・ハロルドの巡礼』編集と伝記的背景—

山口裕美（津山工業高等専門学校講師）

5. 15:45～16:15

『桜の実の熟する時』への道

—信仰の変遷をめぐって—

林盛奎（白石大学校教授）

6. 16:20～16:50

サイキック・ディテクティブの幽霊屋敷

—『フラクスマン・ロウの体験』（1988）を中心に—

金崎茂樹（大阪産業大学准教授）

（司会：佐藤和博 弘前学院大学）

1. 13:15～13:45

レイチェル・カーソン『沈黙の春』と有吉佐和子『複合汚染』との比較
—日本のエコ・フェミニズムと対照しながら—

曾秋桂（台湾淡江大学教授）

2. 13:50～14:20

村上春樹「ノルウェイの森」の呼称について
—日英語の対照研究—

林裕二（西南女学院大学教授）

3. 14:25～14:55

エリザベス・ボウエンと二つのアイルランド

米山優子（静岡県立大学講師）

休憩（14:55～15:10）

（司会：曾秋桂 台湾淡江大学）

4. 15:10～15:40

復讐劇プロタゴニストにみる人間の条件
—近代初期イギリス演劇と現代の映画の個人の概念—

中村友紀（関東学院大学教授）

5. 15:45～16:15

在日朝鮮人文学の様相
—『朝鮮時報』（1961年1月から1963年12月）を中心に—

呉恩英（愛知淑徳大学講師）

6. 16:20～16:50

グロテスク・リアリズムの視点から読む Reflections in a Golden Eye
—場面展開に使用される音楽描写に着目して—

岩塚さおり（名城大学非常勤講師）

第4会場：3215教室《プロフェッショナル研究領域（企業・司法・教育・スポーツ）》

（司会：佐藤知条 湖北短期大学）

1. 13：15～13：45

多文化共生を実践する組織

—多様性を活かす企業の取り組みから—

郭潔蓉（東京未来大学教授）

2. 13：50～14：20

法廷通訳の仕事に関する実態調査

—2012年と2017年の調査から—

水野かほる（静岡県立大学准教授）・森直香（静岡県立大学講師）

3. 14：25～14：55

中国における大学カリキュラム改革に関する考察

—教養教育を中心にして—

神崎明坤（西南女学院大学教授）

（休憩 14：55～15：10）

（司会：大矢隆二 常葉大学）

4. 15：10～15：40

外国語教育におけるインターナショナルスクールの取り組みに関する一考察

東本裕子（横浜商科大学准教授）

5. 15：45～16：15

技の説明を付ける空手の指導方法と学習のモチベーション

カルロヴァー・ペトラ（早稲田大学助手）

6. 16：20～16：50

日本の「あし文化」と膝

栗山緑（日本スロージョギング協会）

第5会場：3219教室 《National Systems for Diversity》 English Session

(Moderator: Matthias Pfeifer, University of Shizuoka)

1. 15:10～15:40

Canada's Changing School Population: The Views of Six Administrative Leaders

Neil Heffernan (Kurume University, Associate Professor)

2. 15:45～16:15

A Study on the Right of a Married Couple to Use Separate Surnames in Japan

Kim, Tae Young (Gangneung-Wonju National University, Professor)

第6会場：3313教室 ≪メディア研究領域≫

(司会：伊藤豊 山形大学)

1. 13:15～13:45

理想郷を取り戻す白人の英雄たち

—アメリカ映画における「白人救世主」神話の構造分析—

ファイファー・マティアス (静岡県立大学准教授)

2. 13:50～14:20

クリント・イーストウッド西部劇におけるマイノリティー表象の一考察

—『荒野のストレンジャー』から『グラン・トリノ』まで—

深津勇仁 (福岡女子大学非常勤講師)

3. 14:25～14:55

マルチモーダル表現ジャンルの基本的要素に関する考察

—ライトノベルの構成単位を巡って—

落合由治 (台湾淡江大学教授)

休憩 (14:55～15:10)

(司会：八尋春海 西南女学院大学)

4. 15:10～15:40

民話「はなたれ小僧さん」における「しば」とは何か

—各メディアに対する比較文化的視座から—

大谷鉄平 (長崎外国語大学講師)

5. 15:45～16:15

日本語の新聞見出しの特徴

—主見出しを中心に—

劉吉香 (関西外国語大学大学院/中国東北電力大学講師)

6. 16:20～16:50

関連性理論における日中公共広告表現の分析

—メタファーによる広告の説得力—

黄琬詒 (同志社大学大学院博士前期課程)

第7会場：3314 教室 《グローバル研究・多文化共生研究領域》

(司会：安藤雅之 常葉大学)

1. 13:15～13:45

セネガルの民衆の中に芽生え始めた新たな価値観と生活改善

鈴木宣行 (創価大学教授)

2. 13:50～14:20

アメリカ・サンフランシスコの日系・日本人社会の変容
—ある長期滞在の日本人の語りから—

田中真奈美 (東京未来大学教授)

3. 14:25～14:55

在日朝鮮人のブラジル韓国人移民共同体形成における役割考察

林永彦 (全南大学学術研究教授)

休憩 (14:55～15:10)

(司会：鈴木宣行 創価大学)

4. 15:10～15:40

日韓両国の領土(独島=竹島)認識の違い分析

崔長根 (大邱大学校教授)

5. 15:45～16:15

地球は宇宙船なのか？
—サイバネティクス批判—

横地徳広 (弘前大学准教授)

6. 16:20～16:50

地域にリンクした英語教育(外国語活動)と異文化間コミュニケーションの実践に関する研究
—英語を使って、いったい何ができるようになるのか—

山崎祐一 (長崎県立大学教授)

第8会場：3315教室 《文化人類学・文化史・地域社会研究領域》

(司会：大崎洋 愛知学泉大学)

1. 13:15～13:45

清末民初の中国における東洋髪

劉玲芳 (大阪大学大学院博士後期課程)

2. 13:50～14:20

カザフ人の婚姻儀礼「Қыдалық»^{クダルク}についての一考察
—カザフスタン共和国アルマトゥ市の事例より—

齋藤篤 (早稲田大学大学院博士後期課程)

3. 14:25～14:55

朝鮮美術展覧会と女流画家・羅蕙錫

李尚珍 (山梨英和大学准教授)

休憩 (14:55～15:10)

(司会：白鳥絢也 常葉大学)

4. 15:10～15:40

内村鑑三と『外国語の研究』(1899)
—『東京独立雑誌』刊行時代を中心に—

小林竜一 (江戸川学園取手高等学校専任教諭)

5. 15:45～16:15

地縁組織の幸福論について

大崎洋 (愛知学泉大学客員研究員)

第9会場：3316《日本文化・比較文化・異文化間コミュニケーション研究領域》

(司会：横山由香 元仁川大学校)

1. 13:15～13:45

ドラマ化された中日『西遊記』の比較研究

—三蔵法師のチームビルディングに着目して—

楊黎 (同志社大学特別研究生・湖南大学大学院)・田口哲也 (同志社大学教授)

2. 13:50～14:20

特別活動における「伝統・文化」教育の充実と推進に関する一考察

—「外国籍児童を含む」学校の事例から—

白鳥絢也 (常葉大学准教授)・澤田敬人 (静岡県立大学准教授)・津村公博 (浜松学院大学教授)

3. 14:25～14:55

王夫之と伊藤仁斎の義理説を中心とする中日易学研究の比較考察

董可 (同志社大学特別研究生・湖南大学大学院)・田口哲也 (同志社大学教授)

休憩 (14:55～15:10)

(司会：梶原雄 同志社大学)

4. 15:10～15:40

留学生への異文化接触支援

—先行研究とエリクソン・アドラー理論の比較から—

山下明昭 (香川大学教授)

5. 15:45～16:15

学校応援歌に関する研究

—旧制中等学校における応援歌の分析から—

金塚基 (東京未来大学准教授)

6. 16:20～16:50

インドネシア人日本語学習者による身体表現のオノマトペ習得の研究

—看護師・介護福祉士のための現場における使用例を参考に—

ウィラスティ・アンレニ (同志社大学大学院博士前期課程)

(司会：山崎祐一 長崎県立大学)

1. 13:15～13:45

CLILと英語プレゼンテーションについて

高橋強 (東海大学准教授)

2. 13:50～14:20

Experimental Syntaxを用いた日本語の語彙的使役動詞の生成メカニズムの検討

森友梨映 (同志社大学大学院博士前期課程)

3. 14:25～14:55

日本語教育のすそ野を広げる

奥村訓代 (高知大学教授)・公文素子 (高知大学非常勤講師)

休憩 (14:55～15:10)

(司会：山内信幸 同志社大学)

4. 15:10～15:40

「AとB」と「AとBと」の構造と意味に関する一考察

徐佩伶 (台湾淡江大学助理教授)

5. 15:45～16:15

日本語構文意味論の可能性：モダリティとしての日本語受動構文

藤岡克則 (大阪産業大学教授)

6. 16:20～16:50

テモラウ文の意味機能に関する一考察

林青樺 (台湾淡江大学副教授)

1. 13:15～13:45

言語習得に有効な母語活用の一例
—英語原書版と日本語訳書版を使った絵本の「読み聞かせ」—

木戸美幸（京都光華女子大学教授）

言語間の大きな距離が、日本語母語話者にとって、外国語である英語の習得を困難にしている点については、これまでよく指摘されてきた。他方、ヨーロッパでは、ことばの教育に関して、母語と外国語をてがかりに、その表層の違いと共通の性質について理解し、それによってことばを効果的に習得する「複言語主義」が注目されている。

日本語と英語を比較することで、英語の習得につながることを想定し、まずは言語への気づきを目的とした教材として、絵本の英語原書版と日本語訳書版の併用に着目した。実践したのは、以下2つのケースである。

1) 保育士・幼稚園教諭・小学校教諭をめざす「こども教育学部」2年生対象の基礎教養科目「英語」では、小学校3年生用国語の教科書に掲載されている日本語訳書版『としょかんライオン』と、この英語原書版 *Library Lion* を比較した授業を実施したところ、とりわけ、統語、語彙に関する気づきが多くみられ、さらに、作品の背景となっている登場人物の考え方や行動に、文化的差異を見出す受講生が多くいた。

2) 保育園年長児を対象とした「読み聞かせ」では、『できる』 *I Can*、『まって』 *Wait*、『みる』 *I See*、『おやすみ ゴリラくん』 *Good Night, Gorilla*、以上それぞれ4冊について、英語原書版と日本語訳書版を併用した。その結果、音、語彙、文字表記に関する気づきが見られた。かつて小学校1年生を対象として、日本語で訳すことをしない「読み聞かせ」を実施したときには、イラストを見ても意味がつかめず、ストレスを感じる児童が一定数いたが、今回、日本語訳書も同時に読み聞かせる作業によって、意味がわかった上で、イラストを楽しみながら英語を聞くことができるので、園児の興味関心は大変高かった。

上記の2つのケースについて、学生・園児の「気づき」の例を挙げた上で、英語原書版と日本語訳書版が揃った絵本を紹介しつつ、今後期待される言語学習の場での利用について提案する。

2. 13:50～14:20

台湾での日本語作文授業における異文化への気付きの可能性

羅曉勤（銘傳大学准教授）

発表者は、台湾の大学で日本語教育に携わっている。そして、台湾の場合、大学などの、いわゆる高等教育で日本語を学ぶ学習者の多くは、卒業後、日本語関連の職業に就くことが多い。ただ、その教育現場では、言語の五技能の養成や、形式を重視したビジネス日本語力の養成に注力する傾向にあり、異文化間コミュニケーションに起因するビジネス面での問題といった、さまざまなコンフリクト（近藤 1998、立川 2013）には、あまり着目されていないのが現状である。

こうした問題に対して、近藤、金（2010）は、背景を異にする者同士が、日本語を使い協働するためには、異文化理解はもちろんのこと、課題を達成していく能力や、問題を発見してそれを解決する能力が重要だということを指摘した上で、ビジネス場面におけるコンフリクトの事例を用いて、協働環境下において、日本語学習者が、ビジネスコミュニケーション上の問題点やその解決策を討論しながら考えるといったケースメソッドに基づく学習方法といった、いわゆる「ケース学習」というアプローチを提案した。

発表者としても、その教育現場においては、内容を重視した授業デザインを意識すべく、台湾での日本語人材育成の一つの方向性として、特に、日本の企業文化に適する、もしくはそれらを理解した人材の育成をしたいと考えている。そして、勤務校で携わっている日本語作文授業において、それを実践すべく、近藤、金（2010）が提唱した「ケース学習」の概念を導入し、企業で実際に生じた問題や当事者間のコンフリクトが記されたケース教材を用いて、そこに示された問題を解決のために討論をするといったアプローチを授業に試行的に導入した。本発表は、日本語授業活動に、こうした「ケース学習」を導入することにより、日本語学習者が異文化間のコンフリクトをどのように理解、もしくは受け入れるのかを、学習者が記した作文を分析・考察を行うことで明らかにし、「ケース学習」の可能性を検討するものである。

3. 14:25～14:55

日本語の授受表現の習得研究－中国人の日本語学習者の誤用分析を例に－

李寰飛 (同志社大学大学院博士前期課程)

彭(2009)、稲熊(2006)、孫(2011)などが述べるように、様々な母語の日本語学習者は、日本語授受表現を学習する際に、誤用は非常に多く観察されることから、とりわけ、中国人日本語学習者の場合、母語の中国語の影響によって、知らないうちにこの心理的特徴が強化され、さらに、中国語の文法パターンと考え方で日本語を勉強するようになる。従って、各段階においていろいろな間違いの影響を受け、授受表現の習得困難を感じずようになると考えられる。関連の先行研究としては、原田(2006)では、日本語には、恩恵・利益の授受に関わる「やる(あげる)・もらう・くれる」のような専用の授受表現の形式が存在していると指摘している。また、稲熊(2006)は、日本語の授受表現は、主語の立て方と視点、「ウチ」「ソト」の概念、待遇表現などの要素が絡みあい、学習者にとって難しい項目の一つであると指摘している。さらに、彭(2009)は、日本語授受表現は恩恵を与えると恩恵をもらうの両方で組み立てられ、中国語表現との異なりが大きく、この点において中国人日本語学習者が授受表現を使用する時に、母語にもっとも大きく影響されていると述べている。

以上の先行研究から二つの知見を導くことができる。まず、日本語授受表現には単に「物ごとを人に渡す」という意味だけではなく、「ソト-ウチ」、「上下関係」の人間関係が含まれている。当然、授受表現が使える時、敬語も考慮に入れなければならない。もう一つは、中国語で「授受表現」を使う時、「恩恵意識」あるいは「人間関係」そのようなものを考慮に入れられていないということである。この二点により、中国人日本語学習者が日本語「授受表現」を習得しにくい原因は、母語による影響が大きいと推測できるということが考えられる。それゆえ、授受表現を学習する時、「ソト-ウチ」、「上下関係」、「恩恵意識」のような内容を学習者に意識させる必要がある。

次に学習現場における指摘を検討する。孫(2011)では中国人教師6人は、初中級段階で「恩恵・利益」という基本的な意味機能以外の用法を「被害・不利益」を表す用法として理解しているが、ほぼ共通して授業中にそれらの用法を導入しないと認識されている旨の指摘がある。このことから中国人日本語教師は日本語授受表現を教授する時、日本文化の側面を含む恩恵意識を教育の対象に含めず、中国人日本語学習者が日本語授受表現を使用する時、誤用を伴いやすいと考える。

中国での日本語教育現場で、教材には「授受表現」についての内容は主に文型のみが中心として提示されていること、また、教師の側から「ソト-ウチ」、「上下関係」、「恩恵意識」などのような内容は学習者にまだ意識させていないとすることができる。本研究では、中国人の日本語学習者の誤用分析から、中国人の日本語学習者がよく起こし間違いをまとめ、分析し、誤用や無使用の例を探し出し、仮説・検証を通して、誤用の原因を究明することを目指す。研究方法は以下の通りである。

1. 日中授受表現の相違、及び実際の日本語授受表現の教育現場で教科書の中のいくつかの問題点の分析により、問題の所在を提示する。2. 日本語授受表現の文法特徴、分類、機能などをまとめ、「もらう」「いただく」「くれる」などの授受動詞の根源的意味を明確化し、さらに、日本語授受表現そのものの機能と、その関連する文化的要素への考察を深める。3. アンケート調査により、調査対象者の「授受表現」の習得程度を明らかにする。問題点を指摘し、教育現場で改善点を考察する。最後に、事後テストを行い、事前テストと比べて、自らの仮説の妥当性を検証する。

4. 15:10～15:40

日中接触場面における感謝表現についての一考察
—学習者の使用実態と使用意識を中心に—

葉倩倩(同志社大学大学院特別研究生)

感謝の気持ちを持つことは、コミュニケーションの場面で重要な役割を果たし、対人関係の潤滑剤として機能する。しかも、感謝することによって、当事者が胸に溜めているストレスが軽減するというプラスの効果も期待できる。

言語間の異同によって、さまざまな感謝表現が観察される。日本語において、感謝表現は、定型表現と定型以外の表現に分けられている。日本人の場合、「すみません」のような詫言表現で、感謝の気持ちを表すこともできる。これらの日本語の感謝表現の使い分けは、中国人日本語学習者（以下、学習者と略す）にとって至難の業であろう。

また、日本語母語話者（以下、母語話者と略す）は、学習者が発音、文法上のミスを行っても、「今、勉強中の人だから」とか、「外国人だから」という理由で、その誤りを許容する。だが、発話行為上の誤りは、表面にははっきり誤りとして現れないため、ともすれば、「この人は失礼だ」とか「礼儀しらず」とか、人格上の欠点と見なされてしまうことにもなりかねない（小池2000）。

もともと、日本語を学習している学習者の最終目標は、日本社会で母語話者と円滑なコミュニケーションが取れるようになることである。そこで、より適切で高度な日本語会話能力を身につけるために、学習者の日中接触場面における感謝表現の使用実態と使用意識を明らかにする必要がある。

本発表では、まず、感謝表現に影響を与える親疎、上下関係などの要素を取り入れて、感謝の表現を誘発すると予想される8つの接触場面を設定し、これらの場面で、どのような言語表現を使うかを被験者に自由記述形式で記入してもらおう。また、ことばを選ぶ時に考えた理由があれば、それも記入してもらおう。それによって、学習者の接触場面における感謝表現に関する言葉使用の実態と意識を明らかにする。そして、調査結果に基づいて、母語話者の感謝言葉の使用傾向と比較しながら、学習者に最適なテキストの提案を行う。

5. 15:45～16:15

日本人英語学習者と英語母語話者の発話比較分析

高橋栄作 (高崎経済大学准教授)

「英語学習ブーム」ということが言われて久しい。書店で、英語学習教材を扱うコーナーへ行けば、とても多くの英語学習教材がところせましと並べられている。しかし、日本人の英語力に目を向けると、2013年 TOEIC[®]テストの日本人平均スコアは512点で、調査対象の48ヶ国中40位という成績である。また、スイスの教育・研究機関である IMD が発表する世界競争力ランキング (World Competitiveness Ranking) では、2016年 Investment & Development, Appeal, Readiness を合わせた総合ランキングでは、61各国中30位であるのに対して、Language Skills のランキングでは最低の61位である。英語学習熱は高いのに英語習熟度はなぜ低いのか。日本人の英語習得を難しくしている要因は何なのか。白井(2008)は、「言語間の距離と習得の難しさ」が第一の要因であるとされている。学習者の母語と学習対象言語が似ていれば、習得が容易であるとする。そこで、日英語は、統語面と音声面の相違があるので、習得が難しいといえる。また、日本人にとって英語の習得が難しいのと同じく、英語母語話者にとっても言語間の距離があるので習得は難しいことになる。2002年アメリカ国防省外国語学校による英語母語話者にとっての難易レベルで、日本語は最難度であった。さらに、外国語を習得する際に言語間の距離に加えて、母語が外国語習得に影響することも問題である。そこで、本考察では、日英語の相違を「母音の数の違い」、「プロソディーの相違」など特に音声面に限って整理する。次に、母語である日本語が習得に影響していると思われる日本人大学生の「日本人英語」の特徴を音声分析ソフト Praat を使って分析する。そして、日本人英語学習者と英語母語話者との発話を比較し、音声的特徴を検討する。最後に、日本人英語学習者が英語を効率的に習得するための提案をおこなう。

6. 16:20～16:50

日本人英語学習者における日本語の転移の生起条件に関する一考察
—英語の文産出における主語・構文の習得に焦点を当てて—

橋尾晋平(同志社大学大学院博士後期課程)

第二言語や外国語を習得する際、母語の諸々の特性が何らかの影響を与えることは広く認められており、この現象について、第二言語習得理論では、転移 (transfer) と呼ばれ、一般的に母語と目標言語の言語的差異が大きいと、その目標言語の項目に関して、学習者が習得する際の難易度が上がり、母語の影響と思われる誤りが起こりやすくなるとされている。しかしながら、客観的な言語差とその項目が学習者にとって習得困難であるかどうかということは一致しないこともしばしばあり、転移の現象がどのような状況・条件で生起するのかは第二言語習得における大きな研究課題となっている。

日本人英語学習者の場合、主語卓越的语言 (subject-prominent language) である英語と主題卓越的语言 (topic-prominent language) である日本語の違いによって、英語で文産出を行う際に、日本語の主題卓越的構造の影響を受け、主語を正しく置くことができない、あるいは、適切な構文を選択できないという問題が想定される。ただし、先述の通り、転移の生起条件については検討する余地があり、この問題についても、「は」という助詞が誤りを誘引するのか、あるいは、過剰に文頭の要素を英語の主語にするのかなどに関して、複数の日本語文を学習者が英語に訳すプロセスを観察することで、詳しく検討していく必要がある。

本研究では、このような主語卓越的か主題卓越型かという日本語と英語の差異に注目することで、日本人英語学習者が文産出において主語を習得する際、日本語からの転移がどのような条件で起きるのかに関して、筆者勤務校で実施した和文英訳のテスト調査をもとに検討していく。本研究のテスト調査は同等の英語運用能力であると想定される2つのグループに対して実施する。例えば、一方のグループに対して、日本語からの転移の影響が大きいと思われる「その映画は知らない。」「うさぎは耳が長い。」などの文の英訳を課すのに対し、もう一方のグループに対して、日本語からの転移の影響が比較的小さいとされる「私はその映画を知らない。」「うさぎの耳は長い。」などの文の英訳を課す。このような最小対の文を素材として、2つのグループで別々に英訳を課すことで、純粋に転移の影響を観察し、日本語の語順や助詞といった要因のどれが学習者に対して英語での産出を困難にする要因になるのかを導く。

【主要参考文献】

- 塚田浩恭. 2001. 『日英語の主題, 主語そして省略』東京: リーベル出版.
三上章. 1969. 『象は鼻が長い——日本文法入門』東京: くろしお出版.
奥津敬一郎. 1978. 『「ボクハウナギダ」の文法—ダとノー』東京: くろしお出版.

1. 13:15～13:45

諦めない女性たち

— 『田舎ミュージズ』『ボヴァリー夫人』『女の一生』『ナナ』を通して—

水町いおり (中京大学非常勤講師)

本発表は、フランス19世紀の代表的な文学作品であるバルザック著『田舎ミュージズ』、フロベール著『ボヴァリー夫人』、モーパッサン著『女の一生』、ゾラ著『ナナ』の4作品の女性主人公を取り上げ、彼女たちを当時のフランス社会に位置付けることを目的とする。

これらの作品は、王政復古(1815-1830)、七月王政(1830-1848)、第二共和政(1848-1852)、第二帝政(1852-1870)と、小説の時代設定や社会背景が異なっている。しかし、フランス革命の後、混迷を極めた社会において、女性たちがどのような暮らしをして、何を感じて生きてきたのかを分析する上で重要な共通点がある。たとえば、主人公の女性たちがみな一様に不幸であること、これらの不幸な女性主人公を描いたのが男性作家であるということ、そして何より、彼女たちは自らの不幸に対して「諦めない女」なのである。

このような興味深い共通点を持つにもかかわらず、研究史を見てみると、現在まで、この4作品に同時に言及する研究はなされていない。というのも、それぞれの作品自体が深く掘り下げて考察する対象であり、あまりにも高名な作家たちの垣根を越えて分析することが困難であったからである。

そこで、本発表では、それぞれの作品の女性たちの描かれ方を分析し、彼女たちを当時の社会とフランスの歴史の中に位置づけたい。それにより、男性が女性を見るまなざしの変容、女性の社会的立場とその変遷、女性たちの内面世界、そしてその小説に固有のジェンダー構造など、さまざまな事柄が明らかになるだろう。なお、繰り返しになるが、本発表では、社会背景や歴史の変遷との関連性を概観し、主人公の女性たちを当時の社会に位置付けることが目的であるため、それぞれの作品を細かく考察するようなテキスト分析の手法は採用していない。

女性主人公たちは、それぞれの不幸な現実に対峙し、苦悩し、けなげにも受け入れ、あるいは克服しようと試みる。本発表では、19世紀のフランス小説に描かれた女性たちの姿について連続性を持った意味づけを示し、不幸だけではない、「諦めない」女たち姿を明らかにしたいと考えている。

2. 13:50～14:20

ラフカディオ・ハーンの邦訳研究
—平井呈一訳を再考する—

木田悟史(三重大学特任准教授)

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) または小泉八雲の邦訳には、1926年から28年にかけて刊行された『小泉八雲全集』を皮切りとするならば、現在に至るまで90年近い歴史があり、何人もの翻訳者がハーン作品を日本語に訳してきた。本発表では、代表的な翻訳者の一人である平井呈一の訳業に焦点を当て、日本でのハーン／八雲像形成の一端を探りたい。平井呈一といえば、日本における海外幻想文学翻訳者の草分けのような人物であり、平井が訳した数々の作品は長らく親しまれてきた。東雅夫『日本幻想文学事典』でもその仕事は高く評価されており、平井が編纂に関わった怪奇幻想文学の作品集のいくつかは、「戦前、散発的な紹介に留まっていた海外の怪奇小説を、初めて系統的な観点から紹介することによって、日本の読書界に幻想文学というジャンルが形成される上での求心的核となった」(323)。

このように海外怪奇幻想文学の邦訳において功績のあった平井呈一は、ラフカディオ・ハーンとも深い関係にあった。早くも十代で『怪談 (Kwaidan)』に魅了されたという平井は、その後もハーンへの愛着を持ち続け、1964年から67年にかけては『全訳小泉八雲作品集』全12巻を成し遂げた。また、1940年に第1刷が発行された岩波文庫の『怪談』は今でも手軽に読める定訳の一つとなっている。平井の訳は、一言で言ってしまえば、凝っている。「耳なし芳一のはなし (“The Story of Mimi-Nashi-Hōichi”)」を例にあげると、亡霊の鎧が立てる音“clank”を「戛々」(13)と文語で訳したり、名を馳せた芳一が手にする“money”の訳としてわざわざ「黄白」(26)という語を使ったりと、所々にこだわりが感じられる。異界で芳一を迎える平家の貴人たちの台詞の訳にも独特の調子がある。

数あるハーンの邦訳の中でも強い存在感を放つ平井の訳であるが、問題がないわけではない。それは、上の例が示しているように、平易なハーンの英語に比べて日本語があまりにもこなれていること、つまり「訳しすぎ」ているということである。これは、「外国人」としてのハーンのまなざしを消してしまっているということでもある。本発表では、ハーンの英文とその平井による訳、および、平井とその他の日本語訳との比較を通して、平井訳の功罪を検討するとともに、平井訳によって浮かび上がる一つのハーン／八雲像についても考察したい。

参考文献

東雅夫『日本幻想文学事典』。筑摩書房、2013。

平井呈一訳『怪談—不思議なことの物語と研究』。岩波書店、2005。

3. 14:25～14:55

異教の神々の跳躍

—ハインリヒ・ハイネと人類解放の夢—

小谷民菜(静岡県立大学准教授)

ハインリヒ・ハイネは、ドイツの民間伝説についてふれた1830年代半ばの著作の中で、次のようなことを述べている。すなわち、古代ゲルマンの汎神論的宗教の名残が、のちの中世の民衆の信仰の中にも生き延びていた。古代ギリシア・ローマの神々もキリスト教によって、異教の名の下に悪魔化されたが、幽鬼の軍勢として夜ごと甦り、あるいは廃墟や山の中に隠れ棲む。ハイネはそれを何度も形象化した。これらはドイツの哲学革命の種であり、ゆくゆくは政治革命となって炸裂する。

1840年『ルートヴィヒ・ベルネ回想録』を刊行したハイネは「ギリシア人」を自任していた。ナザレ的唯心主義に対して、「肉の復権」は人類の真の自由をもたらす革命的贖いへの王道であった。1839年末から3年ほどハイネと直接的交流のあったリヒャルト・ヴァーグナーも上述の、ゲルマン宗教における革命的潜在力を理解していた。ヴァーグナーの『タンホイザー』(1845年初演)のテキストは、『ベルネ回想録』のハイネの哲学的カテゴリーがどれほど深く作曲家の心に刻み込まれていたかを生き生きと示す証拠である。

1840年代から50年代にかけての評論集『ルテーツィア』において、自由な政治的意見表明が困難な場合のやむを得ない代用として、芸術記事、特に音楽論説が成立するということがあった。ハイネの音楽評論には、それがある意味で政治を対象としているという特色がある。地位を確立した名声の高い幾人もの音楽家に対し、その政治的姿勢が非難された。彼らの芸術は階級支配の強化と美化に奉仕し、ハイネが提唱する「新しい歌」のためのメロディーを見つけることができないからであった。そもそも歌謡はハイネの人類解放の観念において一つの中心的な位置を占める。民謡集『少年の不思議な角笛』(1806-08)を紹介した彼の『ロマン派』(1833-36)は、歌の称賛演説である。

1848年の革命の後、ハイネの言葉によれば「愚行の選ばれし者」が指導者となったとき、個人の解放という詩的な夢は後期抒情詩のどぎついイメージの内に消えていく。『ロマンツェーロ』(1851)所収の「ヴァルキューレ」は、卑しくさもしいものが高貴なものに対して繰り返し勝利を収める様子を描き出す。このような皮肉はこの後期の詩集の中心的な主題である。リストとヴァーグナーの新音楽を揶揄した詩においても、挫折した革命への無念さが反映している。そこには宗教批判も含まれる。

晩年の『流謫の神々』とその補遺『女神ディアナ』で若き日のテーマが再び取り上げられる。ディアナと共に狩をする、夜のデーモンに変形された神々は、その自然な官能主義が長い間キリスト教に抑圧されてきた異教のゲルマン宗教を象徴している。作品の中で描かれる神々の帰還一人間の官能主義的性格の回復と言ってもよいが、これが革命の目標であった。終末の場面では、生き返った騎士に変容の後光が射す。異国に避難したハイネにおいて滅多に描かれることのない救済である。

4. 15:10～15:40

19世紀後半から20世紀初頭に語られたバイロンのイメージ
—『チャイルド・ハロルドの巡礼』編集と伝記的背景—

山口裕美(津山工業高等専門学校講師)

ジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron) の『チャイルド・ハロルドの巡礼』(*Childe Harold's Pilgrimage*) は、作者のグランド・ツアーの経験に基づいて、執筆され、1812年から1818年に刊行された作品である。本作品は、19世紀後半から20世紀前半にかけて、幾人もの編集者によって、それぞれに本文構成を変更しながら、編集本が刊行されてきた。そのなかで、イギリスを含めたヨーロッパ地域のみならず、インドやオーストラリアなどの被植民地地域の研究者による編集本も刊行されたことがわかっている。これらの編集本のほとんどには、編集者が執筆した作者バイロンの伝記的背景や作品としての『チャイルド・ハロルドの巡礼』に関する解説が掲載されている。

本研究の目的は、これらの編集本に掲載された作者の伝記的背景や作品に関する解説が、読者の作品読解に対してどのような効果を秘めているか検証するものである。複数の編集本を比較し、これらの解説が挿入されている箇所、記述法について、考察する。編集者それぞれが、作者や作品について関心をよせている点や、読者へと届けたい情報、また対象とする読者への配慮について読み解く。結果として、編集者の解説により、どのようにバイロンのイメージが、読者のなかで形成されたか、また、そのバイロンのイメージによって、読者による作品読解に対して、いかなる影響を及ぼしたかについて論じたい。

*本研究は JSPS 科研費・若手研究 (B) 「『チャイルド・ハロルドの巡礼』と読者—協働で変容するテキストとコンテキスト (16K16798)」の助成を受けたものである。

5. 15:45～16:15

『桜の実の熟する時』への道
—信仰の変遷をめぐる—

林盛奎(白石大学校教授)

『桜の実の熟する時』は大正八年、暗い曲折の中でかかれた、明治二十年代への回想である。大正二年正月号の「文章世界」には、中村星潮、正宗白鳥、小川未明、徳田秋声、森田草平、鈴木三重吉、田山花袋など自然主義作家が同誌上を彩っている。もちろん藤村も浅草新片町に居て『桜の実』を連載し始める。『桜の実の熟する時』を書く藤村は、すでに姪との事情を経験していたし、その出来事を中心とした作品「新生」を書いている。『桜の実』は大正二年四月、藤村の〈新生事件〉といわれるフランスへの旅により、第二章までで終わりとする。大正三年五月から「文章世界」に断続連載され大正七年六月完成した。そのうち第五章まではパリの客舎で、パリでは、着いてから原稿を送る予定であったが、大正三年一月から『桜の実の熟する時』と改題して最初から書き直し、第一次世界大戦にぶつかって、原稿のうち第三章は原稿が紛失して日本に着かず、改めて原稿を書き送って、大正四年二月までかかって、打ち切り、帰国する。第六章以下は、大正六年二月から連載し始める。帰国し、二年ほどまたもや〈新生事件〉の再燃の時期にあつて、前章(一章～五章)と後章(六章以後)の雰囲気微妙な変化が注目をひく。藤村のいうように『桜の実の熟する時』は性の発芽期の、若いゆえ苦悩する青年達を「若い日の幸福のしるし」(八)のシンボルとして取材し、将来のことにいいがたい恐怖を感じながら、誰もが待っている新しい世界、その遠くて近いような翹望を持って踏出そうとする明るい群像をありありと描いている。若い青年時代を描いたものであるが、亀井勝一郎は「中年期の危機に遭遇した人の筆である。(中略)むしろ『新生』の裡において考へた方がよいと思はれる部分もある(2)」と言う。和田謹吾は「〈新生〉事件を胸に秘めていた藤村が、フランスで〈自分等の早い青年期〉を思ひ浮かべて書き進めた前半は、作風としては、『食後』や『微風』の流れに属するもので比較的〈性〉の問題が強く意識されている。それに対して、後半は〈旅〉の思想に支えられている」と言い、「『新生』に至る自己の問題の発足点を、藤村はこの『桜の実の熟する時』のなかで」見つめていたもので、まさに「〈『新生』の序曲〉とも見るべきものである(3)」と言う。しかも『春』には見られない明るさと、青春をすでに通り越した藤村が青春の本質を客観的に冷静に見つめている姿がうかがえる。青年たちの性の発芽と恋愛の自覚、将来のことに對する不安と周囲の無理解、キリスト教の信仰の受容と離脱、友情などすべての青年たちがこだわっている問題を藤村自身のそれに照らし合わせた自伝小説であり、教養小説と見ることもできる。

6. 16:20～16:50

サイキック・ディテクティブの幽霊屋敷
— 『フラクスマン・ロウの体験』(1988)を中心に—

金崎茂樹(大阪産業大学准教授)

英国で一八六〇年代頃から活気を呈するジャンルとして「ゴースト・ストーリー」がある。その特徴の一つに、前時代の古典ゴシック文学期の作品の特質を受け継ぎながらも、舞台設定や登場人物はより等身大になっていったことが挙げられる。言い換えれば、ゴシック小説で典型的であった遠い昔の異国の物語から、同時代で domestic なものへと変貌を遂げていったのである。また人間の暗部もさることながら、霊の实在の是非に焦点が置かれる傾向にあり、そうした推移の結果、いわゆる「幽霊屋敷」にまつわる作品がそれなりの量で残存することになった。

またゴースト・ストーリーの中には、その怪異の原因を解明するサイキック・ディテクティブが活躍するものも出てきた。この新たなキャラクターは、アイルランド人作家シェリダン・レ・ファニュー (Sheridan Le Fanu) の『鏡の中にほの暗く (*In a Glass Darkly*)』(1872)に登場するヘッセリウス博士が嚆矢とされ、後期ヴィクトリア朝から一九三〇年代までを一つのピークとして数多く登場した。その背景には、当然だが探偵ということもあり、同時代のもう一つのジャンルであるミステリの影響も見逃せない。

本発表では、ゴースト・ストーリーとの関係やミステリとの差異などを通じてサイキック・ディテクティブの諸相を簡単に整理した後、サイキック・ディテクティブが登場する初の本格的な連作集である E & H・ヘロン (E. and H. Heron) (Kate and Hesketh Prichard の変名) 作『フラクスマン・ロウの体験 (*The Experiences of Flaxman Low*)』(1898) を主に取り上げ、探偵が怪異と遭遇する「幽霊屋敷」などの特定の場所がどのように表象されているのかを考察し、事件の原因として典型的な「過去の呪い」が予想外に現代的な問題を孕んでいることを指摘したい。

1. 13:15～13:45

レイチェル・カーソン『沈黙の春』と有吉佐和子『複合汚染』との比較
—日本のエコ・フェミニズムと対照しながら—

曾秋桂(台湾淡江大学教授)

1962年に出版されたレイチェル・カーソン『沈黙の春』は、当時のアメリカ社会で賛辞と共に攻撃も受けていた。当時のケネディ大統領がそれに注目し、カーソンが描いた『沈黙の春』の状況を調べよと命令を出し、農薬の使用禁止政策を打ち出すようになったという。一方、同時期の日本でも公害問題は深刻化していたが、国民的関心を大きく惹くようになった契機のひとつは有吉佐和子の『複合汚染』（初出1974年、単行本上下1975年）である。女性作家であり、また人間中心主義から自然中心主義への転換の呼びかけの主張という点で両作品は共通している。上述の共通点から言えば、両作品は、男性の視点では捉えられない、環境へ向ける女性の視点から初めて生まれたものといえ、それをエコ・フェミニズムによる創作と呼ぶことにしたい。

周知のように、科学者のカーソンが『沈黙の春』では証拠を一々挙げて公害の問題点について主張を裏付けているのに対して、小説家有吉佐和子の『複合汚染』は前半後半に断絶があると批判されたが、実は、全編を通じた語り手が語る「語りとしてのストーリー」があると認められる。

そこで、本発表では、この小説作法のテクニクに基づき、フェミニズムとエコロジー思想が接近・遭遇しつつも、基本的価値観の相違から距離を取らざるを得なかったフェミニズム中心の日本のエコ・フェミニズムの事情と対照しながら、エコ・フェミニズムにおける有吉佐和子『複合汚染』独自の位置づけを明らかにし、通常に言われる日本のエコ・フェミニズムとは異なる、別なエコ・フェミニズムの潮流として再検討することを目的とする。

キーワード：カーソン 『沈黙の春』 有吉佐和子 『複合汚染』 エコ・フェミニズム

2. 13:50～14:20

村上春樹「ノルウェイの森」の呼称について
— 日英語の対照研究 —

林裕二 (西南女学院大学教授)

1987年に出された「ノルウェイの森」は、日本国内で大ベストセラーとなり、二つの英訳が出ている。最初の英訳は、1989年に Alfred Birnbaum により、二回目は、2000年に Jay Rubin により、いずれも *Norwegian Wood* として出版されている。今回は原作と Rubin 訳を対照させて、呼称について考察する。

本論での呼称とは、次の二つである。原作から例を引用すると、「ねえワタナベ君、私のこと好き?」「もちろん」と僕は答えた。「じゃあ私のおねがいをつたつ聞いてくれる?」「みつつ聞くよ」。この中の、「ワタナベ君」が、会話の中での登場人物による呼び掛け語であり、「僕」が地の文で語り手が誰を何と呼ぶかの一例である。

日本語の呼称関係は、鈴木孝夫 (1973 ことばと文化) が、次のように規定している。先ず親族関係については、(年齢の) 上下関係によることを示している。またそれが更に社会にも適用可能であることも示している。英語では、D. Biber et. al. (1999) を援用している。そこでは、呼び掛け語は会話の当事者の社会的関係を定義、維持するものとされ、七段階の親しさの尺度が提示されている。

呼び掛け語は、日本語よりも英語の方で使われることが多く、その豊かさは登場人物たちの人間関係がどのようなものであるかを示すものとして機能している。

なお、2017年3月の本学会九州支部大会でも、同様のことを発表した。今回は原作・英訳の両方ともに全体を対象としたものであり、より精緻な考察を加えている。

3. 14:25～14:55

エリザベス・ボウエンと二つのアイルランド

米山優子(静岡県立大学講師)

アングロ・アイリッシュの小説家エリザベス・ボウエン(Elizabeth Bowen, 1899-1973)は、アイルランドが生まれ故郷であると自覚し、恐らくそのことによって自らのものの見方が解き明かされると述べている(*A Day in the Dark and Other Stories*)。イギリス人のアイルランドとアイルランド人のアイルランドという二つのアイルランドを常に意識していたボウエンにとって、郷土に対する思いは生涯複雑であった。アイルランドを題材にした作品群の中で、特に高く評価されているのが「夏の夜」(‘Summer Night’, 1941)である。ボウエンの才気が発揮されるジャンルは、作家自身のあらゆる技芸と語りの形式を兼ね備えた「長い短編」であり、「夏の夜」はその代表作であると言える。ボウエンは、戦時を描きながら戦争自体を主題にすることは避け、登場人物の屈折したヨーロッパ観にアングロ・アイリッシュとしてのアイデンティティを重ね合わせている。

第二次世界大戦中、イギリス政府にアイルランドの情勢を伝えていたボウエンは、アイルランドが孤立しているのは国際社会の全般的な施策を把握する力が欠如しているためであると指摘している(‘Eire’)。アイルランドは、中立という立場を選ぶことでヨーロッパと距離を置いていた。ボウエンはアイルランド語をアイルランド文化の象徴と捉え、その隆盛に国民意識の高まりを認めている。アイルランド語を理解しないボウエンは、アイルランド国民と距離を感じつつ、アングロ・アイリッシュとアイルランド人との精神的な溝を狭めるためには、前者の歩み寄りが鍵となることを示唆している。「中立はアイルランドにとって初めての自己主張であり、それだけで大きな意味をもっている。アイルランドは自らの中立を建設的に捉えており、単に否定しているわけではない。アイルランドの態度がイングランドにとって無知(blindness)、自己中心主義(egotism)、現実逃避、完全な臆病者であると映るに違いないということがわからないのは、まさしくアイルランドの激しやすい偏狭な考え方の典型である。」(‘Notes on Eire’)

本発表では、「夏の夜」の考察を中心に、アングロ・アイリッシュとして生きたボウエンの自我と「引き裂かれた忠誠心」について論じる。

4. 15:10～15:40

復讐劇プロタゴニストにみる人間の条件
—近代初期イギリス演劇と現代の映画の個人の概念—

中村友紀(関東学院大学教授)

本稿では、近代初期イングランド復讐劇のプロタゴニストのキャラクタライゼーションのコンヴェンションを分析し、近代的個人の概念をそうした定型を成立させる重要要因であるとして検証する。次いで、人物造型における近代初期に始まるコンヴェンションの、現代の映画における継承・影響を検証する。

シェイクスピアやその他のエリザベス朝・ジェームズ朝の劇作家による復讐劇ジャンルには、キャラクタライゼーションのコンヴェンションともいべき常套的人物像が認められる。特に、復讐者であるプロタゴニストの典型的属性として多く見られるのは、権威への対立者であること、正義の追求者であること、ルサンチマンに凝り固まっていること、復讐の是非に迷い悩むこと、マキャベリズム的策謀を企てることなどがある。さらには、多くの場合、復讐者は途中で手段を選ばない冷酷無比な悪漢と化し、最終的には滅びるのが常套である。また、復讐悲劇の多くの結末は、共同体が多くの犠牲の上に秩序を取り戻すというものであり、このプロットにおいて、復讐者はあたかもスケープゴートのような役割を果たす。Stephen Greenblatt や Katharine Eisaman Maus によると、個人としての自己認識が明確になるのは、権力との対立を通じてである。権力との関係性が個人に自律性を与え、個人像が屹立する過程を本論文では検証する。また、近代初期演劇のプロタゴニストにおける個人の概念には、セネカ悲劇からの影響も関連している。セネカ悲劇は、チューダー後期のイングランドの法学院や大学で盛んに模倣された、教養的リソースであった。近年、法学院におけるセネカ受容のあり方については、Jessica Winston の綿密な史料調査に基づいた研究などにより解明が進んでいる。こうした情報に基づき、当時の政治的・宗教的・経済的環境において、ルネサンス人文主義的セネカ受容がもたらした個人像の形成要因について本論文で議論する。

この論文のもう一つの論点は、近代初期復讐劇のコンヴェンションによる、現代の映画のキャラクタライゼーションへの影響である。アメリカン・ニュー・ウェイブと呼ばれる1970年代の一連のアメリカ映画や、マーヴェル映画、スパイ映画などのジャンルにおいて、近代初期的復讐者像が再生産されている例を取り上げ、近代初期から始まる自律的個人の概念を分析する。そうした人物像に見る個人を形成する近代的倫理観や美学的価値尺度が、啓蒙主義やロマン主義の時代を経て現代にまで至った結果としてのプロタゴニスト常套を、現代の映画において検証する。

5. 15:45～16:15

在日朝鮮人文学の様相

— 『朝鮮時報』(1961年1月から1963年12月)を中心に—

呉恩英(愛知淑徳大学講師)

『朝鮮時報』は、日本語で書かれた在日本朝鮮人総聯合会の機関紙である。これは1956年12月8日から発行された『朝鮮総連』を1961年1月2日付から『朝鮮時報』に改題したものである。これが発行される前に朝鮮語版『解放新聞』(後に『朝鮮新報』に改題)が1952年から刊行されていた。ところが、日本語版『朝鮮総連』が刊行するようになったのは、朝鮮人の「正しい要求と訴えが、多くの隣邦の国民のみなさんの中に正しく伝わり、多くの共鳴と友情を得る」(『朝鮮総連』、1956年12月8日付)ためであると、韓徳銖(総連議長)は述べている。

『朝鮮総連』(1956年12月から1960年12月)は、『解放新聞』(1952年度後半から1953年度)に比べると、日本人による記事の割合が多く、連載小説より詩が多い。これは『解放新聞』がハングルで書かれていたことや朝鮮語ができる日本人が少ないことも推察される。

『朝鮮総連』には当時北朝鮮への帰国事業が行われていた時期だったので、帰国に関するエッセーや詩が多く載せられていた。ところが、『朝鮮時報』に改題してからは北朝鮮に帰った人々の便りをはじめ、北朝鮮の状況、そして日本における朝鮮人の民族教育に関する記事が中心になっていた。このような情勢の中、文学分野にも変化が現われていた。

許南麒(在日本朝鮮文学芸術家同盟(文芸同)の委員長、1959年6月)の活躍は『朝鮮総連』に継いで『朝鮮時報』でも見られるが、『朝鮮時報』に改題されてから彼の詩やエッセーだけではなく、文学に関する記事の割合が全体的に減ったことが分かった。連載小説は、金秉斗の「徳利をもらいそこねた男」(1962年1月6日付から3回)と、朴春日の「走る人たち」(1962年10月20日付から8回)くらいで、これら以外は、すでに朝鮮で刊行された小説、あるいは朝鮮の民話などを翻訳したものである。作品欄の構成においては読者が理解しやすく、読みやすくするために工夫されたことが窺える。例えば、朴春日の「走る人たち」の場合は、3回目からタイトルの横に「今週からお読みの方に」という欄が設けられ、前回のものを読まなかった人も理解しやすくなっている。他に李錦玉の詩や金達寿の著書に対する書評などにも変化が見られる。特に李錦玉の詩は3つの中で二つが「女性」、「母」が浮き彫りされ、これが民族、あるいは祖国を連想させるものに繋がっている。

本発表では、『朝鮮時報』に掲載された詩と小説をはじめ、文学分野に関する記事を紹介し、それを中心に在日朝鮮人社会やその文学の変容について検討する。その上、上記の作品をはじめ、記事などに在日朝鮮人社会がどのように描かれているか、また組織の変化や葛藤(総連と民団、韓国と北朝鮮)などについて考察していきたい。

本研究はJSPS 科研費JP15K45678の助成を受けたものです。

6. 16:20~16:50

グロテスク・リアリズムの視点から読む *Reflections in a Golden Eye*
—場面展開に使用される音楽描写に着目して

岩塚さおり（名城大学非常勤講師）

Carson McCullers が、1941年に発表した *Reflections in a Golden Eye*（邦訳『黄金の眼に映るもの』）は、アメリカ南部陸軍の駐屯地で起こった殺人事件の物語で、その事件に関わる登場人物—同性愛の Captain Penderton（ペンダートン大尉）、大尉の妻で姦通者の Leonora（レオノーラ）、レオノーラの姦通者の相手である隣家の Major Langdon（ラングドン少佐）、少佐の妻で病弱な Alison（アリソン）、アリソンに献身的に使えるフィリピン人 Anacleto（アナクレト）、覗き屋の Private Williams（一等兵ウィリアムズ）—それぞれが救いようのない人物として描かれている。

本作品は、カーソン・マッカーズが、North Carolina（ノースカロライナ州）Fayetteville（ファイエットビル）に住んでいた時、信用調査会社の調査員として働いていた夫 Reeves（リーヴズ）が、近隣の陸軍駐屯地、Fort Bragg（ブラッグ砦）で若い兵士が、妻帯者の将校の居住地をのぞき込んでいるところを逮捕されたと、カーソンに話したことがきっかけとなり（Carr, *The Lonely Hunter* 89）、「おとぎ話」と呼びながら、楽しんで書き上げた作品である（Carr, *LH* 90-91）。本作品は、マッカーズが遊び心を持って書いたフィクションであるが、登場人物の多くが、何等かの身体的奇形、異なる性的嗜好、両性具有的な特徴を持って描かれており、これまでの先行論文では、登場人物をグロテスクの視点から論じているものが多い。

南部特有のグロテスクさは、人種差別、性的逸脱者、キリスト教信仰における反知性主義などの社会問題を読者に認識させる目的で描かれる。しかし、本作品においては、音楽描写を用いた場面展開に注目すると、単に南部特有のグロテスクさを問題としているのではなく、軍の駐屯地の異様さを見せていることが分る。その異様さは、Mikhail Bakhtin の説くグロテスク・リアリズム（グロテスクなものが「崇高」と称されるものを引きずり下ろし、抹殺されるものを再生へと導く 45-51）の視点に当てはめて解釈することが出来る。本発表では、グロテスクな人物として描かれるアリソンとフィリピン人の使用人、アナクレトの語る音楽描写が場面展開となり、軍の駐屯地で崇められるペンダートン大尉、ラングドン少佐が、その地位から精神的に転落していく様子を考察する。さらに、語りからは見えないが、グロテスクな人物として揶揄されているアリソンとアナクレトが再生されていくことを検証する。

引用文献

- Bakhtin, Mikhail. *Rabelais and His World. Literary Theory: An Anthology*. Ed. Julie Rivkin and Michael Ryan. Oxford: Blackwell, 1999. 45-51. Print.
- Carr, Virginia Spencer. *The Lonely Hunter: A Biography of Carson McCullers*. London: Peter Owen, 1977. Print.
- . -. *Understanding Carson McCullers*. Columbia: U of South Carolina, 1990. Print.
- Gleeson-White, Sarah. *Strange Bodies: Gender and Identity in the Novels of Carson McCullers*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 2003. Print.
- McCullers, Carson. *Reflections in a Golden Eye*. 1941. Boston: Houghton Mifflin, 1968. Print.
- McPherson, Hugo. "Carson McCullers: Lonely Huntress in *Reflections in a Golden Eye*." *Tamarack Review* (1959): 28-42. Rpt. in *Critical Essays on Carson McCullers*. Ed. Beverly Lyon Clark. New York: G.K. Hall & Co, 1996. Print.

1. 13:15～13:45

多文化共生を実践する組織
—多様性を活かす企業の取り組みから—

郭潔蓉(東京未来大学教授)

米国にトランプ政権が誕生して以来、保護主義的な政策の展開により、世界各国における市民社会や社会的組織を取り巻く文化的価値観への影響が懸念されている。しかし、逆説的に考えるならば、グローバル化と多文化社会を再考する好機とも捉えられるのではないだろうか。特に米国や欧州におけるエスノセントリズム(自民族中心主義、または、自文化中心主義)勢力の台頭は、世界中で「時代の逆戻り」や「差別主義」との批判も多い。グローバル化が進化した現代だからこそ、文化の違いを認め合って互いに学び合うことが社会的価値を生むのではないだろうか。本研究では、以上のことを踏まえ、経営組織におけるダイバーシティ・マネジメントの変容を通して、現代社会における多文化共生の実態とそれを実践する企業の実例を取り上げ、その取り組みから考察を深めていきたい。

さて、日本における外国人居住者は、総人口のわずか1.8%(2016年6月現在)に過ぎない。G7等の諸外国と比較をすると非常に小さな数字であるが、この数字は日本社会史上でみると、これまでに無い大きな割合である。日本に居住する外国人の数が急激に急増したのは、1990年の入管法改正以降であるが、この現象を後押ししているのが留学生と外国人労働者の増加である。2016年10月末の企業による外国人雇用は108万人を突破し、その数は年々増加の一途を辿っており、外国人労働者を雇用する企業も年率平均10.7%(2008年から2016年の間)の勢いで増えている。また、近年の特徴としてみられるのが、「派遣」や「請負」といった臨時的な雇用から、長期的な直接雇用へのシフトである。つまり、多くの企業が外国人労働者を自社の戦力として生かし始めているということである。

かつての企業におけるダイバーシティ・マネジメントは社会的弱者への配慮や性差別の撤廃といった観点からの施策が中心であったが、外国人労働者の増加に伴い、従来の観点に加え、多文化との共栄共存を包括した先進的な取り組みが求められるようになってきている。加えて、グローバル化の進化に伴い、市場が世界規模で拡散し、顧客の価値観もニーズも多様化する現代において、多文化との共栄共存は不可避の課題であると考えられる。

これまでの述べてきたことを視野に入れ、本研究発表では経営組織におけるダイバーシティ・マネジメントの変容を明らかにし、多文化との共栄共存を実践する企業の実例を踏まえ、その取り組みから多様性の優位性とは何かを見出したい。そして、こうした取り組みが人口減少社会を迎えた日本にどのような社会的付加価値をもたらす可能性があるかを探求することとする。

2. 13:50～14:20

法廷通訳の仕事に関する実態調査
—2012年と2017年の調査から—

水野かほる（静岡県立大学准教授）・森直香（静岡県立大学講師）

静岡県立大学法廷通訳研究会 高畑幸（静岡県立大学准教授）・水野かほる・森直香・
坂巻静佳（静岡県立大学講師）

日本に滞在・定住する外国人の増加に伴い、日本語を解さない被告人や証人が法廷に立つ場合の通訳や翻訳の必要性・重要性は高まっている。最高裁判所発行の『平成27年版ごぞんじですか法廷通訳』によると、平成25年に全国の地方裁判所や簡易裁判所で判決を受けた被告人59,057人のうち、通訳人がついた外国人被告人は2,261人で、国籍は74か国にのぼる。また、平成25年に全国の法廷で使用された外国語は40言語に及んでいる。

法廷における通訳は、各高等裁判所が管理する法廷通訳人候補者名簿に登録された者の中から事件ごとに選任された通訳人によって行われる。法廷通訳人は、正確さが要求される司法通訳の中でも殊に正確性の確保が求められ、高度な言語能力と通訳技能、守秘義務、通訳人倫理が必要であるが、一方で認定制度が存在せず、身分保障がある訳でもない。さらに、2009年5月の裁判員裁判制度導入は法廷通訳にも負担増となることが予想されたが、法廷通訳人の労働環境についてはこれまで具体的な分析がなされたことはなかった。

そこで、静岡県立大学法廷通訳研究会では、法廷通訳経験者を対象として、法廷通訳人が感じる負担は何か、それを軽減するためにはどのような制度的配慮が必要かを明らかにし、その改善に向けた提案をすることを目的としたアンケート調査を2012年度に実施した。調査の結果、回答者は101名で、自分の能力を生かしたい、社会貢献をしたいという理由で自発的に法廷通訳に携わった人が多かった。しかし、法廷通訳人は、長時間・連日の審理や公の場での通訳へのプレッシャーに疲労を感じており、報酬の不明瞭さへの疑問を持ち、法曹三者の発言に訳しにくいと感じることが多い等が明らかになった。

前回の調査から5年になる2017年、新たな調査項目を加えたアンケート調査を実施している（2017年2～3月）。今回は特に「誤訳にどう対応するか」と「裁判所による研修の効果」に関する質問を加えた。

本報告では、上記2回の調査結果を踏まえ、法廷通訳人のおかれた労働環境や通訳人の感じる負担に、この5年間でどのような変化があったのか、また、最近メディアでの報道もされた「誤訳」問題、裁判所による通訳人対象の研修の実態について、調査結果の報告を行い、そこから導かれる課題について述べる。

<参考文献>

高畑幸・水野かほる・津田守・坂巻静佳・森直香（2013）「法廷通訳の仕事に関する実態調査」『国際関係・比較文化研究』12(1):177-189

水野かほる・津田守（編著）（2016）『裁判員裁判時代の法廷通訳人』大阪大学出版会

3. 14:25～14:55

中国における大学カリキュラム改革に関する考察
—教養教育を中心にして—

神崎明坤(西南女学院大学教授)

1990年代以降、中国の高等教育カリキュラム改革が抜本的に進められている。その要因としては、市場経済の導入により、経済の発展、企業や社会の需要に対応する人材の育成が必要となったことがある。カリキュラム改革の趣旨は高等教育において大学生の総合的な能力の育成と資質教育の重視を理念として掲げることにあり、具体的には、従来の専門教育偏重から脱却し、深い教養教育と高い資質教育及び広い専門教育とのバランスを図るカリキュラム、教育内容へ方向転換することにある。一連の高等教育カリキュラム改革の中でも特に重要なことは、教養教育の増強化による再構築が必要であるという方針を決定したことである。

本発表は、中華人民共和国以降の高等教育において教養教育が形骸化し、軽視されてきた中で、1990年代以降のカリキュラム改革を背景に、現代の高等教育における教養教育の位置づけを歴史的に考察し、直面している諸問題を明らかにし、中国の高等教育における教養教育の再構築の一つの実態を提示することにある。さらに、実証的な調査結果に基づき、国家レベルの教養教育理念、定められている教育目標に関しての教員、学生の意識調査を綿密に分析していきたい。

4. 15:10～15:40

外国語教育におけるインターナショナルスクールの取り組みに関する一考察

東本裕子(横浜商科大学准教授)

近年、小学校における英語科目の導入や、高校における指導言語を英語とする英語授業の開始、また英語や国際関係の専門分野の学生はもちろんのこと、英語以外を専攻分野とする大学生を対象にした、複数年にわたる必修英語科目の設置等、日本における英語教育の過熱傾向は加速する一方である。

幼児や小学生を対象とした英会話スクールや、中学生、高校生を対象とする英語塾、また社会人向けの TOEIC 講座や英語関連の講座も多種多様に存在する。今や英語はどの年齢層においても避けては通れないものとなっているようにさえ見受けられる。

そのような状況の中、日本に居ながらにして国際的な環境にて早期から英語教育を受けられるインターナショナルスクールが脚光を浴びており、プリスクール等の幼児のみを対象とするインターナショナルスクールを含めると、その数は急速に増えている。

本研究では、インターナショナルスクールの英語教育、またその他の言語教育への取り組みについて調査を行う。またどのような家庭がインターナショナルスクールを子供の教育環境として選択しているのかについて、実際にインターナショナルスクールに子供を通わせている保護者やインターナショナルスクールで教鞭をとる教員へのインタビューを通して調査を行う。

なお、本研究は、横浜商科大学学術研究会研究助成金を得ていることをここに記す。

5. 15:45～16:15

技の説明を付ける空手の指導方法と学習のモチベーション

カルロヴァー・ペトラ(早稲田大学助手)

本研究はスリランカにおける空手の指導方法とその学習のモチベーションとの関係を考察するものである。空手は昨年オリンピック競技に採用され、注目されるようになった。一目で良いことと考えられるでしょうが、それに反対する空手家も少なくない。空手の稽古が技を磨くことによって人格高進することではなく、勝てるようにポイントを得るための技を練習する目的になる恐れがあるからである。この対立は、大会で優勝するためのスポーツ空手と、生涯の道として自分を洗練する武道空手の違いを表している。スポーツ空手では、点数によって優勝者が決まるので、勝ち負け・強弱が分かりやすい。オリンピックのメダルも大きなモチベーションになっている。それに対して、武道空手では強さが簡単に見えないので、武道空手の稽古をするモチベーションが課題になる。しかし、若い頃しかスピードと力が大きく出ないスポーツ空手と相違し、武道空手は生涯続けられ、身体だけでなく精神の健康にも貢献するし、中高年にも上達できる。その理由で、本研究は見えない武道空手の強みを技の説明で伝えることが空手学習のモチベーションに繋がるかどうかと研究した。

筆者は2002年より武道空手を代表している公益社団法人日本空手協会の会員で、9年間日本ナショナルチームコーチである中達也師範に指導を受けている。以前から、説明をあまりつけずに技の数を稽古させるという伝統的な空手の教え方が普及されているが、技について知れることが少ないし、繰り返して同じことをやるので、退屈であるという問題点がある。それに対して、中師範は身体の使い方を説明し、技の働き方を体験させるという新しい方法で指導する。中師範が優秀な空手先生として知られているので、筆者はその新しい教え方が空手の学習をするモチベーションを上げていると仮説を立てた。この仮説を確認するために、筆者は中師範の教え方を用い、2016年12月28日には武道空手がほとんどないスリランカ・キャンディで2時間半武道空手の基本技をワークショップで教えて、アンケート調査をした。対象者はスリランカ人で、空手の指導員2人、学習者60人であった。調査の結果は、対象者の95.1%が「今日はたくさん／十分に学んだ」、「稽古が楽しかった」と答え、88.7%が「これで自分の技が強くなる」、95.1%が「今後このように空手を学習したい」と答えた。この結果から、技の適切な説明が空手を学習するモチベーションに繋がるということが分かった。このようなモチベーションが空手のそのものに興味を持たせる内発的動機づけである。それに、80%が「この学び方をしたら大会で勝てる」と回答したので、説明と体験で得た技の理解が外発的動機づけも生むと言えるでしょう。

6. 16:20～16:50

日本の「あし文化」と膝

栗山緑（日本スロージョギング協会）

ヒトの「からだ」を文化の表象体という視点から、日本人の「あし」のもつ文化性を追究している。本発表は、膝からみた日本の「あし文化」についてである。

膝は、坐姿勢を形作るための主要な「あし」の部位である。日本人の最古の坐姿勢は、『魏志倭人伝』に確認でき、その目的は敬意の表意でありその後も一貫したものであった。

日本人はこの「あし」を折りたたんで形成する坐姿勢に、胡坐や正坐（端坐）といった多様性を持ちあわせている（入澤達吉,1920）。そして、日本人にとっての正坐姿勢は、一カ所に留まるためという目的とともに、他者を意識した待機の姿勢であると指摘されている（多田道太郎,1972、山折哲雄,1981）。

武道や作法で行われる「膝行」は、膝が坐姿勢を形作るだけでなく歩くことも可能であることを示唆し、『吉備大臣入唐絵詞』のなかの「飛行（ひぎょう）」（正坐姿勢で空中を移動する）の技は、膝で飛行するとさえ感じさせるのである。

また、坐禅や昭和初期に提唱された正坐姿勢で行う健康法（「岡田式呼吸静坐法」）からは、坐姿勢が精神修練や精神安定を促すこと意味する。それは、かつての多くの日本人はただ正坐姿勢で坐るだけで落ちつくといった気持ちをもつことも同等のものといえる。

日本人の膝を言語的にみると、「膝を交える」や「膝を乗り出す」といった坐の生活が基盤となった比喩表現が幾多も存在することや、「膝小僧」を代表例とするその方言の数が「あし」の他の部位に比して群を抜いて多いこと、そして「膝枕」や「歌膝」などの語彙からは、膝は便利な道具としての機能も持ち合わせていたことも明らかになった。

以上のように、膝こそが日本の坐の文化を形成しているといえるのだが、現代日本人は床坐の生活から椅子坐の生活へと移行している。それは、日本の坐の文化の衰退を危惧されるが、さらには日に何度も坐することで強化されていた日本人の足腰や精神面の安定も同様に危惧されるのである。日本人の「あし」は、文化の形成とともに、心身の健康維持にも寄与していたことも見逃してはならない。

1. 15:10～15:40

Canada's Changing School Population: The Views of Six Administrative Leaders

Neil Heffernan (Kurume University, Associate Professor)

Canada has a reputation internationally as a country of cultural diversity, tolerance and acceptance. This is reflected in both the large number of English as a Second Language (ESL) and bilingual programs available to students starting in elementary school (Berthold, 1995). With the popularity of Canada as a destination for students and refugees alike, there is an increasing need for the country to deal with their ever-growing immigrant population.

In Canada, the presence of non-Canadian students in classrooms is an ever-increasing trend (Citizenship and Immigration Canada, 2011). This rising trend is important because non-Canadian students tend to bring a more diverse set of experiences and backgrounds to multicultural teaching; a factor that can benefit every student in a class (Barry & Lechner, 1995; Gilbert, 1995; Larke, 1990).

The purpose of this study was to investigate the experiences of administrators as they rise to the challenge of meeting the needs of increasingly populous and ethnically diverse schools. It is hoped that information gleaned from interviews with these administrators will increase knowledge of the dynamics in an area to which there is still a lot of work to be done. The ultimate aim of this study was to gain insights on the perspectives of administrators on ethnicity issues in British Columbia and Ontario-area schools and how these issues affect both the educators the students at these schools. The author intended to ascertain what each of the participants believed were the most pertinent issues pertaining to ethnic diversity as they saw it in these two school systems.

The author conducted interviews with six school administrators in the provinces of British Columbia and Ontario in August and September of 2015 and 2016. The interviews were recorded and then later transcribed and analyzed for emergent themes by the researcher upon returning to Japan. Results from the study indicate that all of the administrators interviewed for this study expressed a positive outlook toward the ethnically diverse nature of the schools in which they worked, despite the many unique challenges presented by their circumstances. Namely, despite the difficulties these administrators faced with integrating the students into their schools, ensuring they are getting a good education, not being bullied, and that they are given equal opportunity in all aspects of their lives, the six administrators in this study had a generally positive outlook for the immigrants in their school systems. In essence, the fact that diversity is embraced by the administrators is encouraging and certainly a source of optimism for the future of the Canadian schooling system.

2. 15:45～16:15

A Study on the Right of a Married Couple to Use Separate Surnames in Japan

Kim, Tae Young (Gangneung-Wonju National University, Professor)

Japanese society of Confucian culture has very a distinctive characteristic enough to be called a mutation. I would say the same surname system that has been discussed recently, is also the peculiarities in Japanese society. Among countries of Confucian cultures, only Japan is adopting the same surname system. Whereas the separate surname system has been adopted in other countries of Confucian culture, the only same surname system has been adopted in Japan. For example, Korea that is still deeply rooted in Confucian tradition, has taken the separate surname system based on "principle of patrilineal descent."

Therefore, if a child is born, a child follows the naturally father's surname. However, the surname of the husband and wife is so different breed, the surname of wife unchanged even after marriage. Recently in Japanese society, it has been going on the heated debate surrounding the revision law on the same surname system.

In the process of modernization, Japanese commoners have surnames, but also the separate surname system has been adopted. Generally, many people tend to think it is an old tradition, but surprisingly it was not a long history. Surname of the family, depending on the social characteristics across countries, have taken various forms. In these social backgrounds, it is because there is a religious tradition in particular.

This paper explores the historical and sociological background on the surname and the Meiji Civil Code of 1898 in Japan. Also, in the New Civil Code of 1947, the changing status of women and the concepts of family and marriage are then discussed

In addition, this paper examines revision of Japan's legislation on marriage and surnames, including the results of surveys concerning public opinion poll.

1. 13:15～13:45

理想郷を取り戻す白人の英雄たち
—アメリカ映画における「白人救世主」神話の構造分析—

ファイファー・マティアス（静岡県立大学准教授）

ハリウッド映画の中に、特に60年代以降「白人の救世主」という人物像がある。映画の主人公は自分の社会と切り離された孤独な男性で、アイデンティティ喪失の危機に迫られ、異国で自分探しをする。異文化との出会いにより、主人公は人生をやり直しながら自分を取り戻すことができるようになる。

そこに登場する異文化圏の人々は一般に、西洋の文化に追い詰められた非白人の共同体であり、主人公を西洋の野蛮人と見なす。しかし、その共同体の価値観に惹きつけられる主人公は次第にかれらと親しくなり、結局、その共同体の一員として受け入れられる。

このプロットは特に、なんらかの過渡期によく使われるものだが、構造的に様々な共通点がありながら、時代背景や社会の価値観はそれぞれ異なり、それが様々な形で表現されている。発表では、「白人の救世主」という神話（R.バルト）の変容を、主に三つの映画に基づいてその構造を分析する。

A Man Called Horse（馬と呼ばれた男）1970年

Dance With Wolves（ダンス・ウィズ・ウルブズ）1990年

The Last Samurai（ラスト・サムライ）2006年

V.プロップやR.バルトという構造主義者の分析方法を用い、ネオ・フォルマリズムのアプローチに基づいた映画の構造分析をすることで、主人公たちが求める共同体は現代社会またはグローバル化と対比される理想郷として読めるのか、それともその理想郷は実は、白人文明の優越性を主張する夢に過ぎないのか、という問題について議論する。

2. 13:50～14:20

クリント・イーストウッド西部劇におけるマイノリティー表象の一考察
—『荒野のストレンジャー』から『グラン・トリノ』まで—

深津勇仁(福岡女子大学非常勤講師)

クリント・イーストウッド西部劇の特徴はそれまでの西部劇作品において典型的であるステレオティピカルな善悪二元論描写を大幅に補正した点にあると言われている。具体的には、古典的西部劇の典型描写である保安官＝善、流れ者やアウトロー＝悪といった図式を大幅に転換し、保安官や町の実力者を権力を味方に付けた悪漢として表象した点にある。イーストウッド西部劇シリーズが従来の西部劇作品のステレオティピカルな善悪のレッテルの大幅な補正に挑戦する中で、従来は周縁化されてきた人種のマイノリティーにも主人公の補佐役として大きな役割が与えられるようになった。具体的には、『荒野のストレンジャー』における小人のモルデコイや『アウトロー』に登場するインディアン、『許されざる者』の黒人賞金稼ぎネッド並びに『グラン・トリノ』におけるモン族のタオである¹。イーストウッドは、これまで周縁化されてきた少数民族や黒人、並びに異形の者などにスポットをあてることで、従来の西部劇とは異なる視点からアメリカ社会の欺瞞を喝破する。

本報告では、イーストウッド西部劇作品における人種的マイノリティーに注目し、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』の概念を元に分析を試みる。サイードは西洋の学問大系の中で位置づけられた東洋世界のイメージ形成に、植民地期イギリスの文学作品や古典が大きな役割を果たしたことを明らかにした。このサイードの西洋と東洋の概念規定を西部劇作品における中心と周縁、並びにその具体例でもある白人とそれ以外の人種的差異の特徴的描写へと応用することで、より明確な理解が可能であると考えられる。

¹加藤幹郎、『表象と批評—映画・アニメーション・漫画—』、岩波書店、2010年 同書の第3章において加藤は『グラン・トリノ』を現代版西部劇と規定した上で、同作はイーストウッド西部劇のジャンルの破壊の到着点であると評価した。本報告でも、この議論の遡上で『グラン・トリノ』が西部劇であることを前提とする。

3. 14:25～14:55

マルチモーダル表現ジャンルの基本的要素に関する考察
—ライトノベルの構成単位を巡って—

落合由治(台湾淡江大学教授)

言語研究のもっとも基本的な問題のひとつは、言語とそれが具体的に社会で使われる場合の表現ジャンルとの関係である。従来の言語研究では、文学研究、談話研究、社会言語学などで、部分的には表現ジャンルの問題が取り上げられていたが、考察対象が基本的に言語に関わる部分に限定され、そのジャンルの表現全体を捉える視点は成立が困難であった。

しかし、メディアの各ジャンルを想起すれば容易に理解できるように、実際に社会で有意義な表現として用いられている言語表現は、基本的にすべて言語と非言語表現が一体となったマルチモーダルな特性を持っており、同時にメディアミックスとしてジャンルを超えたマルチジャンルな広がりを持っている。

そこで、本研究では、今まで大学での研究対象としてはほとんど検討されたことのないライトノベルのマルチモーダル表現の基本的要素を考察してみたい。方法として、事例研究として印刷メディアの『〈物語〉シリーズ』と映像メディアの『君の名は。』を取り上げ、それらの表現が実際の表現目的を達成するために用いている全ての表現要素をマルチモーダル表現として取り上げて、特徴と機能を検討する。そして、言語表現と非言語表現の関係を明らかにし、同時に、それがジャンルを超えて拡張していく基本的成立条件を検討してみたい。

同時に、言語表現について質的条件との関係で、その基本的単位を再検討する。言語をそれが使われている場と関連要素に戻して考察することで、より実態に即した表現の単位を見出していきたい。

キーワード：表現 ジャンル 成立条件 要素 マルチモーダル

4. 15:10～15:40

民話「はなたれ小僧さん」における「しば」とは何か
—各メディアに対する比較文化的視座から—

大谷鉄平(長崎外国語大学講師)

本発表は、メディアからの「ことばの使用」への作用性に関する記述的検討の一環である。ここでは、「物語談話(=ナラティヴ)」、特に「口承伝播(『個』対『個』)」から「webページでの発信(『個』対『不特定多数』)」に至るまでのメディアを網羅する個別民話を対象とし、語の意味内容の差異に関し、比較文化的視座より実態を描写する。

ナラティヴが行われる「場=メディア」は、言語活動の様態に基づき、大きく3つに分類されるものと捉える。すなわち、①「口頭ナラティヴ(『個』と『個』が直接対面する場)」、②「書字ナラティヴ(『個』が『個』または『多』に向けて発信する場。なお、TV・ラジオによる発信を含む)」、③「入力ナラティヴ(『個』がwebを用いて『不特定多数』¹に向けて発信する場)」があり、個々のメディアにおいて独自の文化を有するものとみなす。

「はなたれ小僧さん」は、福岡県みやま市山川町真弓に残る民話・伝承とされ、TVメディア(TBS系列「まんが日本昔ばなし(1976.10.30.)」)に登場して以来、観光スポットとしてweb上より拡散し、注目を浴びている。また、方言談話による活字資料も存在する。

ところで、当該民話内に、「おじいさんが売れ残ったしばを水神さまに捧げると、女が現れ、しばの札をいい、小さな小僧を差し出す」との場面がある。ここでの「しば」に関し、各メディア上で、さし示すものが異なっている実態がある。すなわち、現地ネイティヴへの聞き取り調査を行った際、「しば」は神仏への供物となる植物(ヒサカキ)を指すのでは、との指摘があったものの、書物として残るものでは、地元方言によって記された山川町郷土史研究会(編)(2004)『山川町の民話・伝説・伝承』の「しば花」を除き、昔話を紹介する書籍、当該民話の研究結果を記した文章などでは「柴」となっている。また、複数の書字ナラティヴ、ないしTVアニメでのナレーションにおいては、「薪」とある。そして、web上にみられる記述としては、すべて、書字ナラティヴのレベルでの情報のコピー&ペースト、となっている。民話の展開上、「しば」は「水神さまのために川へ流す」アイテムであり、火の燃料となる「枯枝(=柴)」や「薪」では合理的でないにもかかわらず、当該民話に対する先行研究においても、この点は見逃されているのが実態である。

このような伝播様相の差異は、メディアの特徴に起因するものと思われる。口頭ナラティヴでは、あくまで伝聞形式で口承され、起源となる民話は存在しない。また、起源を突き止めようともしない。一方、書字ナラティヴの場合、文字として記録が残るため、諸文献の作成時期を追うことである程度の起源が明確化する。そして、入力ナラティヴでは、書字ナラティヴの複製が主体となる。この差異は、各メディア間での文化的相違を示唆しよう。

¹書字ナラティヴの「多」は、受信者側において情報に関心がある者のみが接触可能であることを示し(例:書籍の購入、TV番組の視聴、など)、「不特定多数」は、関心が無くとも受信する点で異なる。

5. 15:45～16:15

日本語の新聞見出しの特徴
—主見出しを中心に—

劉吉香(関西外国語大学大学院/中国東北電力大学講師)

新聞の見出しは字数が限られ、その限られた字数の中で、簡潔にしかもなるべく誤解を与えないように記すため、通常の文と違う表現形式が多く見られる。本研究は読売新聞のデータベースを利用して、読売新聞の2014年一年分の一面の主見出しを取り出し、考察対象としている。一年分の主見出しの総本数の1479本のうち、名詞止めは1169本で、一番大きな割合を占めており、その次は助詞止め、181本で、1割強を占めている。名詞止めの多さと助詞止めの多用は日本語の新聞見出しの大きな特徴といえる。本研究は量的構造から見ただけでなく、実用例を見て、記事本文と照らし合わせながら、詳細な分析をも行う。新聞の見出しはどんな役割を果たしているのか。なぜ日本語の新聞見出しには名詞止めが多いのか。なぜ述語に相当するものが現れない場合でも、読み手が誤解なく理解できるのか。そこにどんなメカニズムが働いているのか。見出しに現れる助詞はどんな助詞なのか。これらの助詞は普通の文の助詞とどんな違いがあるのか。本研究は以上のような問題を解決することによって、日本語の新聞見出しの特徴を明らかにする。

6. 16:20～16:50

関連性理論における日中公共広告表現の分析
—メタファーによる広告の説得力—

黄琬詒 (同志社大学大学院博士前期課程)

語用論における関連性とは、新井 (2006) によると、認知の経済性を表す概念で、認知効果を分子に、解釈労力を分母にする分数によって表わすことができるとされている。また、新井 (2007) は、説得力を測る尺度の一つとして、関連性の高さを提案し、受信者にとって、受信する情報の関連性が高ければ高いほど、その情報は、受信者にとって説得力が増すと主張した。更に、関連性理論における表意については、Carston (2000) が、一義化、飽和、自由拡充、アドホック概念形成の4つの語用論的プロセスが存在すると指摘した。なお、Carston (2002) によると、関連性理論におけるメタファーは、アドホック概念形成のことを指していることが判明した。

これらの先行研究を踏まえ、本発表では、日本語と中国語による公共広告において、メタファーを含むキャッチコピーは、含まないものよりどのくらい説得力があるのか、関連性理論の枠組みから考察することを目的とする。具体的には、説得力を測る1つの尺度として、新井 (2006) の提案した関連性についての関係式の数値化を試みる。

本発表では、メタファーの有無とキャッチコピーとの関係性を研究対象とし、メタファーを含まないものは、関連性理論における一義化、飽和、自由拡充を指すと規定する。

研究方法については、SD法や五段階評価分析などの方法を使って考察を行う。具体的には、まず、日本語と中国語による公共広告を対象に、メタファーを含むかどうかについて、関連性理論における一義化か飽和か自由拡充のどれに当てはまるかという基準で、予備調査を実施する。正確さを高めるため、言語学の研究に従事する日本語母語話者と中国語母語話者の教員を調査対象とし、オンライン調査で回答を求める。

次に、本調査では、日本語と中国語による公共広告において、メタファーの有無によって広告の説得力に違いが見られるかを明らかにするため、新井 (2006) が提案した認知効果と解釈労力を把握できる質問項目を設定したアンケート調査を行う。誤差を小さくするため、HSK5級・6級に合格した日本語母語話者とN1・N2に合格した中国語母語話者を調査対象とし、オンライン調査で回答を求める。

調査は、(1) 日本語母語話者が日本語のキャッチコピーを判断する場合、(2) 日本語母語話者が中国語のキャッチコピーを判断する場合、(3) 中国語母語話者が中国語のキャッチコピーを判断する場合、(4) 中国語母語話者が日本語のキャッチコピーを判断する場合の4つのタイプに分けて、メタファーの有無という観点から比較する。

その結果、4つのタイプのどのタイプにおいても、日本語と中国語による公共広告について、メタファーを含むキャッチコピーは、含まないものより、説得力があると主張する。

主要参考文献

- 新井恭子. 2006. 「関連性理論における広告のことばの分析」『経営論集』第68号, pp.79-91.
新井恭子. 2007a. 「説得力とは何か—広告表現におけることばの効果—」『経営論集』第69号, pp.171-183.
新井恭子. 2007b. 「説得力と関連性—広告の説得意図と聞き手の注意—」『経営論集』第70号, pp.51-60.
Carston, R. 2000. "Explicature and Semantics," *UCL Working Papers in Linguistics*12, pp.1-44.
Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.

1. 13:15～13:45

セネガルの民衆の中に芽生え始めた新たな価値観と生活改善

鈴木宣行(創価大学教授)

アフリカは貧しい地域なのか? 「貧しい」とは経済的貧困状態を言うのか? この一般的な解説を再考することが今後のアフリカを考える上で、重要になってくると考えている。そして、今後のアフリカの開発・改善を考える上で、アフリカの人々の日常生活の中に存在する価値観について如何に把握するかという点にかかっている。

平成25年度外務省政策評価書の「1. TICAD プロセス及び多国間枠組みを通じたアフリカ開発の推進」の中の「課題と今後の方針」によると、「アフリカの質の高い成長に向けた取組を進める必要がある。それに向けてアフリカにおけるインフラ整備や人材育成、人間の安全保障の推進、平和と安定に向けた協力等を行っていく」と記載されている。

では、「アフリカの質の高い成長に向けた取組を進める」ためには、何が必要なのか。ここで考えなければならない点は、アフリカの開発支援を実施する上で、日本的価値観に基づいて支援を行っても効果が望めないという点である。ならば、どうすべきか。それは、アフリカの民衆が有している価値観に基づいた取組が不可欠であると発表者は考えている。

本発表では、アフリカという広大な大陸を対象とするのではなく、その中の小国セネガルを対象として考えていく。そして、セネガルの民衆が有している価値観と開発・改善についての考察を試みる。

まず、最初はセネガル共和国とはどんな国か、そして、I. アフリカ映画の父と称されるセンベヌ・ウスマンの思想、II. 伝統的価値観から創造的価値観へ、この2点について考察を加えながら、「貧しさ」とは何か、セネガルにおける「豊かさ」とは何か、そして、「経済的豊かさ」ではなく、セネガルの民衆が Jihad/Djihad から生み出される「真の意味の改善に向けた《戦い》」に勝利を得るために、伝統的価値観を底辺に置いた新たな価値観を心の奥底に置いて、「日常生活の改善」を考察していく。

(参考文献)

鈴木宣行「8. セネガル—開発に向けた価値観と教育の変化」木田剛・竹内幸雄編著『安定を模索するアフリカ』ミネルヴァ書房、2017年3月刊

2. 13:50～14:20

アメリカ・サンフランシスコの日系・日本人社会の変容
—ある長期滞在の日本人の語りから—

田中真奈美(東京未来大学教授)

はじめに

江戸幕府が長年禁止していた海外渡航を許可した 1866 年から日本人のアメリカ合衆国への移住が始まった。最初の日本人がサンフランシスコに渡米したのは、1860 年代初頭である。その後、多くの日本人がサンフランシスコに移住し、アメリカの中で最も古い日系コミュニティが形成された。サンフランシスコの日系・日本人社会の変容を明らかにすることにより、アメリカ社会での日系人・日本人の変容を明らかにできると考えた。アメリカ社会の中で社会的地位を確立しつつある日系人・日本人にとっての日系コミュニティの存在価値を明らかにすることは、意義があると確信している。

方法

調査対象者

本研究の調査対象者は、主にメディア関係の仕事をしてながら、日系社会の諸団体の理事を務めるなど、日系社会・日本人社会とつながりの深い長期滞在者の永池薫（仮名 70 代）氏である。

手続き

聞き取り調査は、2015 年 8 月に実施し、半構造化面接で行った。調査は、日系人や日本人が、どのようにコミュニティを形成していったのか、どのように日系・日本人社会が変容してきたのかに焦点を当てて行った。分析は、グラウンデッド・セオリーを使用し、長期滞在の日本人が日系・日本人社会の変容に対してどのような思いを持っているのかを明らかにし、考察した。

結果・考察

永池氏によると、日本文化貿易センターが建設された 1960 年代から 1990 年代は、サンフランシスコ・ジャパントウンは求心力があり、活気のあった時代であった。永池氏がラジオの DJ をしていた頃であり、多くの新一世が活躍をしていた時代であった。

バブル経済崩壊の影響により、1990 年以降、サンフランシスコにあった多くの日系企業のオフィスが閉鎖され、駐在員の数が増減していった。しかし、IT バブルの影響を受け、2000 年以降シリコンバレーを始めとする他の地域に進出する日系企業は増加している。1990 年代までは、ジャパントウンが日系社会の中心であったが、現在は、シリコンバレーの新しい集住地区がコミュニティの中心となりつつある。

本研究から、日系・日本人社会が 2000 年を境とし、大きく変化してきていることが明らかになった。

3. 14 : 25 ~ 14 : 55

在日朝鮮人のブラジル韓国人移民共同体形成における役割考察

林永彦(全南大学学術研究教授)

本研究の目的は在日朝鮮人がブラジル韓国人移民共同体作りにどのような役割を果たしたのかを明らかにすることである。ブラジルへの韓国人移民に関する研究は1970年代から始まり、最近活発になっている。ブラジル韓国人移民に関する先行研究を挙げれば、玄奎煥(1976)、李求洪(1979)、全京洙(1991)、崔錦座(1991)などがある。その中で最近の研究は崔錦座(2012)の‘在ブラジル韓人社会と文化アイデンティティ’、李采文他(2016)の‘ブラジル居住アジア系移民の過去と現在-韓国人と日系人移住者の比較研究-’などがある。その中でも特に興味深いのは全京洙(1991)の研究であり、彼の研究はブラジルにおける韓国人研究に関する地平を広げたと評価されている。とくに彼は研究の中でブラジル現地調査を通して1945年敗戦以前当時在日朝鮮人のブラジル移民に関する家族構成の観点から移民類型を分類して移民の特徴を家族移民と単身移民として区分した。そして、彼は当時在日朝鮮人移民者たちが同一地域に住みながらお互いの存在は知っていたが、婚姻関係の断絶など相互交流がまったくなかったので民族共同体を形成するほどの力量もなく特別な組織活動もなかったと報告した。

これに対して全淑美(2006)は新しい観点から1945年敗戦以前の在日朝鮮人ブラジル移民を研究した。彼女は研究の中で最初ブラジルへの在日朝鮮人移民者に対して1928年3月神戸に建てられた‘国立移民収容所’の記録に基づいて1928年1名、1931年12名など合計13名であると推定した(全淑美, 2006: 94)。また全淑美(2010)は日本植民地期の在日朝鮮人ブラジル移住者について個人的な立場から1918年朴学基、1927年陳学文、1928年張承浩、1920年後半金水祚、1931年金永斗などを見つけ出し、彼らをブラジル現地インタビュー調査で確認したことがある(全淑美, 2010: 98-99)。

在日朝鮮人たちのブラジル移住が1920年代後半に集中された理由については1919年当時朝鮮における3・1独立運動に触発された朝鮮人移民制限政策による家族招聘移民への転換、日本内政治経済的状况により朝鮮人のブラジルへの移民が主に日本人のネットワークによって行われたからである。とくに日本人のブラジル移住が1927年から1934年までに集中されたが、その理由としては第1次世界大戦による戦後日本経済の不況と農村部における小作争議の発生、1923年関東大震災の発生、1924年米国による新移民法の公布による北米への日本人移民禁止と国策移民(官約移民)としてのブラジル選択、1927年世界大恐慌などによる日本からのブラジル移住ブームに便乗して数少ない在日朝鮮人たちが移住するようになった。

結論的に、韓国からのブラジル移民は1945年敗戦以後1950年韓国戦争による1956年反共捕虜50人が入国することから始まり、当時日系人居住地で住んでいた朝鮮人との繋がりによって1990年代以降本格的に韓国人共同体形成の背景になったと考えられる。

4. 15:10～15:40

日韓両国の領土(独島=竹島)認識の違い分析

崔長根(大邱大学校教授)

竹島問題は対日平和条約を締結後、韓国政府が平和線を宣言して日本の独島(韓国名)への接近を禁止したことに「竹島は日本の領土」だと抗議して始まった。独島は元々東海に位置した鬱陵島から見える無人島として鬱陵島に建国された于山国の領土だったが、512年、于山国が新羅に編入された。

近代に入って1876年、日本が武力による脅迫で門戸を開放し、鬱陵島と独島に侵入したとき、朝鮮王朝は海禁政策を捨てて検察使李奎遠を派遣して鬱陵島と独島を調査した後、1882年、鬱陵島に住民を移住させた。大韓帝国は1900年勅令41号で「鬱島郡」を設置して「鬱陵全島、竹島、石島(独島)」を管轄した(李奎遠観察日記、勅令41号、軍艦日記「新高号」)。日本は日露戦争中に戦場となった大韓帝国の混乱に乗じて密かに内閣会議で大韓帝国の領土である独島を無主地と扱い、島根県告示40号で領土編入の措置を取った。そして1年経った時点で外交権を強奪してソウルに統監府を設置した後、島根県官吏が鬱陵島の沈興澤郡守を訪問して独島が日本の新しい領土になったと圧力を加えた。沈郡守は、翌日緊急に「本郡所属の独島」が日本に侵奪されたと中央政府に報告した。内部大臣は、統監府に抗議し、独島が大韓帝国領土であることを再度確認させた(皇城新聞)。1910年大韓帝国が強制的に日本に併合されたが、1945年連合国が第2次世界大戦で日本を降伏させて韓国を独立させた。連合国軍最高司令部は1946年1月、法律的に「済州島、鬱陵島、独島」が韓国領土であることを認めて日本の侵入を禁止した(カイロ宣言、ポツダム宣言、東京裁判、SCAPIN 677号、SCAPIN 1033号)。ところで、1951年9月48カ国と日本との間に締結された対日平和条約では日本の領土から除外される地域に「済州島、巨文島、鬱陵島」を列してSCAPIN 677号にあった「独島」の名を削除した。それは何を意味するのか。実は、「済州島、巨文島、鬱陵島」は有人島で「独島」は無人島である。連合国軍最高司令部覚書や対日平和条約は、日本帝国が侵略した領土を没収すると決定したカイロ宣言とポツダム宣言を履行するためのものだった。対日平和条約で日本が侵略した独島の名称が消えたのは連合国軍最高司令部覚書で韓国領土と扱った「独島」に対して日本が自国の固有領土だと抗議したためだ。連合国は日本の主張があまりにも狡猾であったので無人島であった独島の領土主権を区分が容易でなかった。連合国は最終的に紛争の余地がある島々の中で有人島は信託統治にし、無人島は現状維持を方針とした(1951年8月海上保安庁発行の「日本領域参考図」、1952年毎日新聞発行の「日本領域島」)。終戦後、冷戦の状況のなかで米国の強要によって1965年韓日協定が締結された。その時も韓国は日本の挑発に対しても「独島の領土問題は存在しない」との立場を貫徹させ、今日まで独島を管轄統治してきている。

5. 15:45～16:15

地球は宇宙船なのか？
—サイバネティクス批判—

横地徳広 (弘前大学准教授)

「宇宙船地球号」。

キャッチーなネーミングである。しかし、「取扱い説明書」なしでも宇宙船地球号をうまく航行し、沈めてはならないとバックミンスター・フラーが言うとき（『宇宙地球号』、51頁）——クワインが知識のホーリズムを説明するのにもちいた「ノイラートの船」という比喻を思わせる口ぶりだが——、そうした地球号の存在原理は何であったか。

「サイバネティクス」である。これは、確率的意味をもつ情報が0と1のデジタル・データへと変換されて通信と制御の工学による操作対象となり、生体と機械が接合可能になるテクノサイエンスの総合領域のことであった。

当然だが、地球は「人工物」ではない。「地球科学」で解き明かされているように、多様な自然物の集合体である。しかし、「地球システム科学」で言われる「生物圏 (biosphere)」に、人類は「技術圏 (technosphere)」を広げてきたから、地球は単なる「自然物」とはもう言えないのも確かなことである。しかも、核戦争で人類が地球に存続しえない可能性がすでに生じているかぎり、このかぎりではペンタゴンの「救命ボート倫理」よりも「宇宙船地球号」という環境科学思想のほうが現代世界の实情に合っている (Kristin S. Shrader-Frechette, “Frontier or Cowboy Ethics” and “Lifeboat Ethics”, in: *Environmental Ethics*, Rowman & Littlefield Publishers, 1998, pp. 31-44.)。

しかしながら、本発表で解き明かしたいのは、キャッチーなイメージと異なり、むしろその裏で宇宙船地球号という発想が人類に危険をもたらす怖さである。こうした解明のため、宇宙船地球号が前提とするサイバネティクスの内実を確認し、そのうえでサイバネティクスにもとづく「シナジェティクス」のホーリズムと、サイバネティクスが前提する「デザイン」概念とを、科学史、科学哲学、環境倫理学の観点から考察する。

《参考文献》

Richard Buckminster Fuller, *Operating Manual for Spaceship Earth*, Introduction by Jaime Snyder, Lars Müller Publishers, 2008 (1929).

リチャード・バックミンスター・フラー『宇宙船地球号 操縦マニュアル』、芹沢高志訳、ちくま学芸文庫、2000年。

Kristin S. Shrader-Frechette, “Frontier or Cowboy Ethics” and “Lifeboat Ethics”, in: *Environmental Ethics*, Rowman & Littlefield Publishers, 1998.

6. 16:20～16:50

地域にリンクした英語教育（外国語活動）と異文化間コミュニケーションの実践に関する研究
—英語を使って、いったい何ができるようになるのか—

山崎祐一（長崎県立大学教授）

本発表では、2017年度より長崎県佐世保市で展開されようとしている英語プロジェクトについて概説しながら、地域の実態に応じた英語学習が地域の異文化共生や英語学習者の学習意欲の向上にどのように役立つ可能性があるのか、また、学習者がこれまでに獲得した英語の知識や技術を使って、いったい何ができるようになるのかについて、英語や異文化理解学習に関する大学生の地域貢献の取組実践の内容も含めて報告する。

佐世保市には、約6,000人のアメリカ人が在住しており、同市は歴史的にアメリカ文化が混在している都市である。市内にはアメリカンスクール3校（小学校2校、中高一貫校1校）が存在し、日本語が必修科目として設けられているなど、国際交流行事のみならず、日常生活の中で、児童生徒も含め、市民レベルでの異文化接触の機会も多い。社会全体のグローバル化が進み、これに対応できる国際的な人材が求められる現在、国際社会で活躍するために最も必要な資質が、自らの考えを発信する言葉の力とともに、自分のアイデンティティは保ちつつ、同時に相手の考え方も受け止め容認する柔軟性や協調性を持った異文化間コミュニケーション能力であると考えたとき、佐世保市はグローバル人材を育成する土壌としては恵まれた環境をすでに有していると言える。

また、同市は2016年4月より中核市の指定を受けており、その中で特色のあるまちづくりの推進を目指していることもあり、同市教育委員会は、「グローバル人材が育つまち」をテーマに、具体的なプロジェクトを立ち上げている。手段としては、子どもたちの異文化理解や英語教育・学習環境の充実を図り、グローバル人材育成の基盤を形成すること、市民の外国文化や外国人に対する親近感と英語に対する関心や学習意欲を醸成すること、市民のライフスタイルや学習意欲に応じた発展性のある英語学習環境を構築すること、さらには、新たな事業・産業の創発、雇用の創出によって地域活性化につなぐことである。具体的には、教員の資質と児童生徒の学力及び英語力向上、地域未来塾事業、英語シャワー事業など、官民に学が加わる形で、「気軽さ」、「親しみやすさ」、「楽しさ」を重視しながら、市民の英語や英語圏文化に対する親しみ・興味・関心を喚起する取組を実践しようとしている。

本発表では、科研費研究課題（基盤研究C〔平成26年度～29年度〕）に係る研究課題に関連し、「英語を活用した大学生の地域貢献活動と地域の異文化共生」を主要なテーマとし、大学生がアメリカンスクールや地域の小中学校において、そして佐世保商工会議所との産学連携体制のもとこれまでに取り組んできたサービスラーニングの実践が、当プロジェクトにどのように有効に繋がっていくのかについて、過去の実績も含めて報告する。

1. 13:15～13:45

清末民初の中国における東洋髪

劉玲芳（大阪大学大学院博士後期課程）

清末民初（大体1880～1920年代）の中国において、日本人の服装を着たり、日本人女性の髪型（中国では「東洋髪」と呼ばれていた）を真似したりしていた女性が居た。つまり、日本人の服飾文化を楽しむ現象があったのだ。中でもとりわけ東洋髪が中国人女性の間の人気を博していた。例えば、当時、日本の女性用薬品「中将湯」を中国で販売しようとする広告には、中国服を着て東洋髪をしている女性の姿が描かれている。また、中国において最も影響力を持ち、広く読まれていた『申報』の関連記事からも、東洋髪が一時的に流行っていたことが伺える。ところが、一般的に中国服装史において、東洋髪は、清末民初に現れた女性の一つのファッションとしてわずかに紹介される程度である。したがって、東洋髪が中国に渡った原因や流行経緯について、まだ不明という状態なのである。

本発表は、日中両国の新聞と雑誌などの文字資料に加え、画像（広告や写真）資料を使用し、清末から民国初期の中国における東洋髪を受容過程を明らかにすることを目的とする。本発表では流行の過程を明らかにするため、最新の流行を作り出しながら客をもてなしていた妓女と、日本に留学して日本文化を中国へ伝えていた女子留学生との二つのグループを対象を絞った。

分析の結果、中国の花柳界において、中国の妓女は日本人の真似をし、異国の服飾を身にまとうことによって、客を喜ばせたり、人目を引いたりしていた行動が見られた。さらに、清末民初の中国において、租界文化の発展と外国人居留地が増加するにつれ、中国に渡航する日本人の芸妓や売春する女性たちも急増した。彼女たちは中国人妓女らのライバルであると同時に、真似する対象でもあった。つまり、日本人芸妓の来華は、中国人の東洋髪流行と受容に拍車をかけたものと推測できるのである。他方、同時期、清末民初に日本で留学していた女性が次々と中国に帰国した。帰国後の彼女たちの中には、日本人と同じく和服を着て、日本式な東髪をしていた人たちが一定数いた。留日経験を持つ女性たちは、後に中国の女子教育や女性解放を牽引する人たちであると同時に、新しい知識と文明を表象する人たちであった。彼女らの風俗は昔の妓女の最先端のファッションとは異なり、次第に教育界や知識層の女性に影響を及ぼしていった。こうして、中国服を着ながら「東洋髪」をしている女性は、次第に文明と進歩を代表する象徴となったのである。さらに、1910年代以降の『申報』の記事からは、「東洋髪」はあっという間に流行し、一般化していったこともわかった。

以上、本発表では、妓女のファッションから、留日女学生の影響を経、一般の中国人女性まで「東洋髪」の流行が広がっていったという「東洋髪」の受容過程について述べる。

キーワード：東洋髪、清末民初、妓女、留日女学生

2. 13:50～14:20

カザフ人の婚姻儀礼「Қыдалық」についての一考察
—カザフスタン共和国アルマトゥ市の事例より—

齋藤篤(早稲田大学大学院博士後期課程)

カザフスタン共和国(以降カザフスタン)は、1991年に旧ソビエト連邦から独立した国であり、カザフ人やロシア人をはじめ約130の民族が居住している多民族国家である。これらの民族はそれぞれに人生儀礼や宗教などにかんする多種多様な儀礼などを有していたが、カザフスタンがソビエト連邦に属していた時代には規模が縮小してしまっただ。現在のカザフスタンでは伝統復興に力が入れられており、国内各所で祝祭が実施されているが、そのような場で見られるのはコンサートや物品・食品の販売などであり、伝統に根ざしている、と人々が認識するものはあまり見られない。

カザフスタンの人々が営んできた伝統実践はどのようなものだったのだろうか。また、独立後、経済発展著しいカザフスタンにおいて、どのように推移しているのだろうか。これを知るためには、個々の家族の実践を観察し、それについての語りを聞くことが不可欠である。筆者は現在までにカザフスタンの人々が実践する諸儀礼の観察およびインタビューを行っており、本研究では、カザフスタンにおいて最大多数を占めているカザフ人が実践する儀礼「クダルック」に注目した。

「クダルック」は「Қыда(義理の親族)」と「лық(多数)」の合成語である。本儀礼はカザフ人が婚姻時に実施する儀礼の一つである。カザフ人は儀礼の際に親族や客を招いて盛大な祝宴を催すことが多々あるが、現在までに観察されたクダルックの事例では、祝宴に加えて、他の儀礼では見られない「Қуырлық-бауыр」という料理が用いられていた。

「クイルク・バウル」は「Қуырлық」は「尾(の脂肪)」を意味し、「бауыр」は「肝臓」を意味するカザフ語である。この料理は3~4センチ四方に切って茹でた羊の尾の脂肪と肝臓を串に刺したものを基本単位としており、材料となる羊の脂肪には、油が豊富であるということから、「栄養が多い、裕福な状態」を、羊の肝臓には「近い関係」をあらわしていた。

また、クダルックの際には、夫方親族から妻方親族に対して贈り物が送られていた。贈り物は花嫁の母親をはじめとした妻方親族のメンバーそれぞれに贈られ、事前に贈り物を贈る相手について、夫方親族、妻方親族が協議する事例も見られた。

本研究では、このクダルックにおける「クイルク・バウル」と贈り物に着目し、その意味と婚姻プロセスにおいて果たす役割について考察を行っていく。

3. 14:25～14:55

朝鮮美術展覧会と女流画家・羅蕙錫

李尚珍(山梨英和大学准教授)

朝鮮美術展覧会(以下、朝鮮美展と称する。)は、1922年から1944年まで毎年朝鮮で開催された日本政府による官展である。その開催は植民統治権力の正当化と日本への同化政策を目的として、広く文化・芸術領域への統制及び管理を強化することによる朝鮮民衆の意識改造という狙いがあった。しかし、「朝鮮社会(画家及び民衆)」は、一方で日本の目的を認識していたが、他方で「公平」、「審査の厳密さ」を訴えつつ、朝鮮美展を「社会的・文化的啓蒙の機会」、「芸術力育成の場」、「近代化表象の空間」として捉えていく傾向にあった。

また、朝鮮美展には、在朝鮮日本人画家たちが多く参加し、美術活動を展開していったが、日本留学を経験し、朝鮮の近代化を積極的に主張した朝鮮の若者たちの活躍も目立った。1922年6月1日、京城府泳楽町の商品陳列館において第1回が開催されると、西洋画部門で入選者60名のうち、朝鮮人画家は羅蕙錫(1896～1948)、高義東(1886～1965)、丁奎益(1895～1925)の3名であった。

ここで報告者は、女流画家・羅蕙錫の朝鮮美術における活躍に注目する。

羅は画家・作家・美術評論家として芸術・言論活動で頭角を現した「近代新女性」であり、朝鮮美展に出品を続けながら、作品制作と美術評論を通して朝鮮美術界のあるべき姿を作り上げようとした人物である。そして、朝鮮美展を朝鮮の「近代化表象の空間」として強く意識し、画家のみならず民衆に向けて身分制度や男尊女卑などの旧習、前近代的な価値観から抜け出し、「自我に目覚める」ことを訴えていった。

羅は1913年4月、東京私立女子美術学校の西洋画専科に入学し、1915年11月には西洋学科の高等師範科本科に転科し、岡田三郎助に師事した。在学中、羅は大正時代の日本の新しい思想に刺激を受け、近代文化受容に積極的であった崔承九(慶応義塾大学)、廉想涉(慶応義塾大学)、李光洙(早稲田大学)らの在東京朝鮮人留学生との交流を深め、「個の尊重」を主張する白樺派の思想を理解し、受け入れていった。

帰国後は、1921年3月に毎日申報社や京城日報社の後援によって朝鮮初の女流画家個展を開催し、同年4月に第1回西洋画協会展覧会に高義東とともに油絵を出品し、1922年の第1回朝鮮美展に西洋画〈春が来た〉と〈農家〉を出品し、入選した。

本研究報告では、羅の朝鮮美展の出品作品と美術評論を分析しながら、朝鮮美展における羅の活動の意義を明確にし、朝鮮美術界と朝鮮社会への影響について考察する。

付記

本研究は独立行政法人日本学術振興会の科研費(26370143)の助成を受けている。

4. 15:10～15:40

内村鑑三と『外国語の研究』(1899)
—『東京独立雑誌』刊行時代を中心に—

小林竜一(江戸川学園取手高等学校専任教諭)

内村鑑三は近代日本におけるキリスト教思想家として理解されているばかりでなく、*Japan and the Japanese* (1894)や*How I Became a Christian: Out of My Diary* (1895)といった英文著作があることから、新渡戸稲造や岡倉覚三とともに、「三大英文家」と称される存在でもある。

本発表では、キリスト教思想家としての内村にではなく、「英文家」としての内村に焦点をあて、『東京独立雑誌』に掲載され、『外国語の研究』(1899)と題して刊行された内村の言説を中心に分析をすすめたい。

英語と英語学習法は、今も昔も日本人の関心事である。本発表のねらいは、内村が近代日本社会に要請した英語学習について考察を展開することにより、中等・高等教育の如何を問わず、現代における英語教育の問題点を内村の視点から捉えることにある。

5. 15:45～16:15

地縁組織の幸福論について

大崎洋(愛知学泉大学客員研究員)

地縁組織とは、住民が居住する地域内の土地やそれに関連する各種の生活条件の共同利用と管理を行い、さらに土地を媒介にして成立する人間関係やそのまとまり集団である地域住民組織の中核的組織としての町内会・自治会、コミュニティ組織を指す。

町内会・自治会の存在意義等については議論のあるところであるが、町内会・自治会は「有志のボランティアで、やりたい人がやれる範囲のことをするのが基本」なので、行政の組織力に比べると社会的なサービスを行う存在としては、町内会・自治会のできることは限られている。しかし町内会・自治会でしかできないことは、地域活動を通じて「自分はこの地縁組織の一員であり、住みやすい・住んでよかった。」というコミュニティ意識、共同体意識を醸成することが最も重要と思われる。

「幸福」の定義は様々であり、『幸福論』として主要なものにアリストテレス、ヒルティ、アラン、ラッセル、ショーペンハウアーの著作があるが、共通していることは、「物質的・金銭的に豊かな幸福」より「精神的な幸福」を「刹那的な幸福」より「人生の幸福」を追求している。特にバートランド・ラッセル(1872～1970)は『ラッセル幸福論』において「幸福は、一部は外部の環境に一部は自分自身に依存している」とし、「自我と社会が客観的な関心や愛情によって結合されること」の重要性を述べている。この視座にたち、「地縁組織の幸福」を考えたとき自我と社会を適切につなぎ、地域活動に関心をもち、参加する人を増やしていくことの大切さに気付く。

また、ジェレミー・ベンサム(1748～1832)は快楽を最大化、苦悩を最小化し、社会にとって「正しい行為」とは、関係する人の幸福を増進する行為であるとすることによって、「最大多数の最大幸福」を保障することにイギリス政府の最重要目標がおかれるべきだと言明した。2世紀以上前の主張であり、『ハーバード白熱教室』のマイケル・サンデル(1953～)の批判もあるが、経済活動を伴わない助け合いの精神が横溢した「最大多数の最大幸福」は地縁組織の目指す理念と思われる。近年、経済成長のみにかたよった生活満足のあり方は世界中で見直されており、であり「ブータンのGNH」、「熊本県民総幸福量」からも考察したい。

昭和期の高度経済成長時代に多くの人々が実感していた「希望」や「幸福」は特殊時代的ともいえるものであり、この状態の再現は不可能であろう。地域社会の主役は子どもと高齢者のはずであるが、孤立が進み停滞感が増幅している。日本文化は「自律の文化」ともいえるものであり、日本人は人間関係を大事にし、つながりあう関係性の中で自分の生き方を律する生活をしてきた。和辻哲郎(1889～1960)は『倫理学』において、人と人との間柄の基礎となる信頼について述べている。地縁組織の幸福論の要は、今の時代を考慮した「つながり」の再編ではないだろうか。

1. 13:15～13:45

ドラマ化された中日『西遊記』の比較研究
—三蔵法師のチームビルディングに着目して—

楊黎（同志社大学特別研究生・湖南大学大学院）・田口哲也（同志社大学教授）

中国「四大奇書」の一つである『西遊記』は江戸時代に日本に伝来して以来、日本人がそれを翻訳し、研究・解明に努めてきた。とりわけ、2006年に放送された日本版ドラマ『西遊記』は高い人気を呼んだ。同様に、中国においても、映像作品ドラマ『西遊記』（1985、CCTV制作）は30年間も放送されるという神話的な存在となっている。中日両国のドラマ版『西遊記』が高い人気を誇ったのは、製作者側が現代の視聴者が何を望んでいるのかという文化的要因を受け止め、この要因に対応するように原著を脚色したからではなかろうか。本研究ではこの脚色のうち、とりわけ三蔵法師が果たす中日のドラマでの役割の異同に着目し、中日両国におけるドラマ化において三蔵法師のチームワークの役割がどのような背景のもとに再構築されたのか、その原因とメカニズムを解明する。

以下具体的な研究方法についてその概要を記す。まずはテキスト分析を通して、原著に見られる三蔵法師を正確にとらえ直し、その後「ベルビンチームワーク理論」を用いて、中国のCCTV版『西遊記』と日本の富士版『西遊記』における三蔵法師のチーム役割の定量分析を行う。そして両版における三蔵法師のそれぞれの作り変えの特徴と意図を比較し、最後はなぜそのような結果が生じたのか、その原因とメカニズムを究明する。例えば、「文化緯度論」に基づいて、脚色上の異同を定性的に分析し、異同が生じる原因とメカニズムを究明していきたい。最終的には、これらの分析結果を受けて、文化の輸出元と輸出先との文化伝承の関係性や中国の古典小説に登場するキャラクターの日本における受容と変容のあり方考察していきたい。

2. 13:50～14:20

特別活動における「伝統・文化」教育の充実と推進に関する一考察
—「外国籍児童を含む」学校の事例から—

白鳥絢也（常葉大学准教授）・澤田敬人（静岡県立大学准教授）・
津村公博（浜松学院大学教授）

本発表では、外国籍児童が在籍する学校において、日本の文化や伝統を一方的に押し付けるのではなく、外国籍児童の文化的背景を考慮した取り組みを実践している小学校の取り組みを紹介する。

静岡県中部地域で外国籍の子どもを積極的に受け入れているA小学校では、外国籍の子どもたちに対して、本人の自国民としての立場を保障することと、日本語や日本の風習について十分に教育することを同時に目指し、日々の実践が営まれている。その際、①違いを違いとして認め合うこと（相互主義）、②多様性を認めること（多元主義）、③異質と多様性を認める以上、自分自身の独自性を確立すること、④独自性と同時に、普遍性をも理解することを重視している。

地域の自然や歴史、文化、施設や人材を積極的に活用し、例えば川の上流から下流までの様子、水質や生き物、川と住民との生活や歴史について調べたり、河原や土手での遊びを体験したりしている。また、地域の伝承芸能を体験したり、先人の活躍（小泉八雲等）を調べたりしている。さらに、博物館や図書館、高齢者施設等を訪問したり、漁師や商店街の人を招いて仕事の話をしてもらったりといった学習が行われている。

その他、東海一の荒祭りと言われる「焼津神社例大祭」、重要無形民俗文化財に指定されている「藤守の田遊び」等、地域に伝承する行事に外国籍の子どもが参加することを実践している。（実際に参加したり、街を飾るイラストを描いたりする）市内各商店街や地域の神社、仏閣等で行われるお祭りを地域の人たちと一緒に創っていくことを通して、その地域の結びつきや絆を強めるねらいがある。また、その地域における伝統文化を継承し、知ることで地域に対する愛情も増し、それが外国籍の子どもも含めた「地域住民」によるまちづくりの第一歩に繋がっていくと考えている。

これらの体験は、日本の子どもたちにとっても有意義であり、自国文化への理解、郷土の文化を保存し継承してきた先人の思いを肌で感じることに繋がるであろう。身近な体験を通して、自分たちの生き方を支えてきた歴史や文化への理解を深めることは、他国・他民族の持つ歴史や文化を尊重する態度の育成にも繋がるものと考えられる。自分と相手の違いを認め、尊重するという生き方の確立を図ることは、小学校において大きな課題であり、伝統・文化に関する実践から育まれるものであるともいえる。

※本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（平成28-30年度 基盤研究（C）「国際化社会に生きる青少年の共生を目指した教材モデルの開発に関する研究」課題番号：16K04561，研究代表者：白鳥絢也）の助成を受けて行われたものであり、ここに謹んで感謝の意を添えます。

3. 14:25～14:55

王夫之と伊藤仁斎の義理説を中心とする中日易学研究の比較考察

董可（同志社大学特別研究生・湖南大学大学院）・田口哲也（同志社大学教授）

『易経』は儒教の基本書籍である五経の筆頭に挙げられる經典であり、日本文化に深い影響を与えた。陰と陽を六つずつ組み合わせた六十四卦によって自然と人生との変化の法則を説く。経文とその解説書である「十翼」とを合わせて12編からなる、この『易経』が、どのように理解されてきたかを大別すると「象数易」と「義理易」に分けることができる。本研究では湖湘学派易学の代表者である王夫之と、日本古学派易学の代表者である伊藤仁斎の『易経』義理説を考察の対象にする。易学研究を代表するこのふたりの代表的な著作の対比研究を通して、両者の『易経』義理説研究の異同を明確にさせる。次に、この対比研究から明らかになった異同を、中日それぞれの時代背景や学術伝承などの視点からの考察し、中国湖湘学派と日本古学派の易学研究の本質を明らかにしていきたい。

研究方法について簡単に紹介しておく。王夫之の代表的な著作である『周易内伝』と伊藤仁斎の代表的な著作である『易经古義』について、乾と坤との二卦を力点として、具体的なテキストの計量分析によって、易学基本観点や卦の解説、義理の闡明、文章と論証の特徴などの面について対比する。

予測される結果は以下の通りである。王夫之と伊藤仁斎の『易経』義理説は乾卦と坤卦の関係、義理と象数の関係、具体の字の解釈、訓詁の出典、占筮への態度など異なっていることが多い。一方、引証の方法や爻の位置特点に注目することなどは一致している見方もある。学派背景と結合してより具体的に検討すると、中国湖湘学派と日本古学派との易学研究の関連性を見つけることが可能である。

最後に研究の意義について触れる。中国湖湘学派と日本古学派の易学研究について比較研究は、中日易学研究の比較研究そのものにとって意義があるばかりでなく、『易経』、さらには中国儒教經典の日本への伝播、発展、変異に関しても示唆が得られるのではなかろうか。

参考文献

- [1] 朱伯崑．易学哲学史．昆仑出版社．2005，4，1-3
- [2] 王夫之．周易内伝．北京出版社．1996，33-50
- [3] 伊藤仁斎．易经古義，8-20
- [4] 汪学群．王夫之治易的思想历程．孔子研究．1999,9,111-112

4. 15:10～15:40

留学生への異文化接触支援
—先行研究とエリクソン・アドラー理論の比較から—

山下明昭(香川大学教授)

学部専門科目として「多文化共生論」を担当している。この授業での留学生とは、日本への留学生と日本から海外に出かける留学生を意味している。本授業の理論枠組みとしてはエリクソン理論とアドラー理論を用いている。授業の中で留学生への異文化接触の項目において学生が用いた参考文献の中の2点に授業で用いている理論枠組みと相いれないものがあった。本研究発表では、これらの先行研究に対して本授業で用いている理論との比較から先行研究に対する異論を述べるものである。

留学生への異文化接触支援研究は、歴史が浅く、これから多数の研究が発表されることであろう。しかし、留学生への異文化接触支援としては、ただ単に調査、分類を行うだけではなく理論枠組みを見据え理論と理論の比較考察、個々文化背景や個々人の文化背景に対し尊厳を持ちながら比較考察が必要であると考ええる。

末広未樹(2003)のように単に分類するだけでは意味を持たない。例えば異文化適応に対しての5段階に分類しているアドラーの異文化適応段階との比較考察が必要である。カルチャーショックは治療しなければならない病気と考えられていたが、「カルチャーショックはマイナス要因ではなく、自己の成長や滞在する異文化への理解を深めるきっかけである」(アドラー)と述べている。異文化適応の短期適応と長期適応短期適応渡航後数ヶ月文化的アイデンティティは変化しないが、外部環境への変化への認知的適合の問題 普遍性は高い。意識と無意識も別に対立しているのではなく、目的地に向かう車のアクセルとブレーキのように協調的な役割を担う。

これは、ミルトン・エリクソンの「対」に通じる肯定的な無意識観である。しかし、先行研究が述べるような目標が同じだからといって、いつも同じ手段とはならない。同じ手段を取っているからといって、何時も同じ目標とは限らない。「重要なことは、人が何を持って生まれてきたかではなく、与えられたものをどう使いこなすかである」(アドラー)と述べている。さらにアドラーは、課題の分離という主体性と共同体である我々社会に対して無償の愛(慈悲)を提唱している。

中川典子(2013)の調査対象者Cは、アドラーのいう異文化適応の5段階を乗り越えたまたは、エリクソンの5番目の青年期に、アイデンティティ「対」アイデンティティ拡散、混乱(identity vs. identity diffusion, confusion)即ちアイデンティティ獲得とアイデンティティの危機という「対立」ではなく獲得と危機という「対」をバランスよく経験したという分析、考察が必要なのではないだろうか。

参考文献

末広未樹(2003) 異文化接触における日本人留学生のアイデンティティ変容—青年女子の英・米語圏留学を中心に—大阪大学博士論文

中川典子(2013)「日本人留学生の異文化接触とアイデンティティ—留学生前、留学中、帰国後のイメージ分析を通して—流通科学大学論集—人間・社会・自然編—第25巻第2号,53-75

5. 15:45～16:15

学校応援歌に関する研究
—旧制中等学校における応援歌の分析から—

金塚基(東京未来大学准教授)

外国の学校には日本でいう校歌はないようである。校歌は校訓などとともにその学校を象徴し、学校や地域への帰属意識を高め、愛着や誇り(=集団的アイデンティティ)を促進する機能もつともいわれる。学校という集団の一員としての自覚を持たせて、そこの学校の児童・生徒としてのアイデンティティを形成させると考えられる。一方、すべての学校に存在するとは限らないが、多くの学校で自校の運動部などを応援する際に用いられる応援歌といわれるものがある。これらについては、いつ、どうして、どのように発生したのかを具体的に問う先行研究は存在しない。

大正期に近代化した日本のスポーツは、富強主義に基づく教育的主義な価値づけと個人・自由主義的な価値づけとの2面的な緊張関係を有していたといわれる。すでに・明治期の中学校の体育には、徳育的機能が求められていたが、明治末になると、運動部の教育的意義が認められるようになり、かつ、教育活動の一環として捉えられるようになる。

明治期、外国人教師やその影響を受けた教師が陸上、ボート、野球、庭球、フットボールなどのスポーツを旧制中学の生徒に伝達することから普及していったといわれるが、30年前後から、中等学校間での野球の定期戦などが始まり、大正4年に「全国中等学校優勝野球大会」へと吸収されていく。

スポーツ大会は当初学内で行われていたが、次に学校同士の対向試合、さらに連合大会への発展し、その参加校の大部分は公立中学校生徒であったといわれる。これらの背景には、運動を精神の向上と結びつけた論が展開され、他校とのスポーツ対抗演習が愛校心を養成し、一致団結の精神の向上に資すると論じられている。

本研究では、このような社会的背景においてつくられたといえる中等学校の応援歌の内容の分析を通じて、応援が生徒自身の主体的な学校の文化の形成と発展に果たした諸要因について考察することを目的とする。

参考文献

小川隆章・東福寺一郎「校歌が児童・生徒に与える影響—卒業生から見た校歌」『環太平洋大学研究紀要』(4), 73-80, 2011

小野瀬剛志「昭和初期におけるスポーツ論争」『スポーツ社会学研究』9, 60-70, 134, 2001

市山雅美「旧制中等教育学校の生徒の作文にみる道徳性—明治期におけるスポーツと道徳の連関の言説—」『湘南工科大学紀要』50(1), 97-107, 2016-03

日下裕弘「わが国におけるスポーツ組織の形成過程に関する研究Ⅱ」『仙台大学紀要』20, 1-17, 1988-10

6. 16:20～16:50

インドネシア人日本語学習者による身体表現のオノマトペ習得の研究
—看護師・介護福祉士のための現場における使用例を参考にして—

ウィラスティ・アンレニ(同志社大学大学院博士前期課程)

日本の高齢化社会が進んでいるなか、看護師や介護福祉士の人手不足が深刻になってきている。そのため、2008年から、日本政府はインドネシア、フィリピン、ベトナムからの看護・介護福祉候補者を受け入れ始めた。応募する看護・介護福祉候補者は、日本とインドネシア両政府間で結ばれている経済連携協定(Economic Partnership Agreement: EPA)に基づき、看護や介護の経験はもちろん、少なくとも日本語能力試験 N5 という条件を満たさなければ、日本への研修が認められないことになっている。

介護福祉候補者の日本語運用能力向上のために、さまざまな取り組みがなされてきたが、オノマトペの運用はあまり注目されていない。服部・東山(2010)によると、医療は集団による行為であり、コミュニケーションの効率性などを求めるため、複数の情報を埋め込んでいるオノマトペは重要と考えられる。Makino&Tsutsui(1994)は、日本語によるコミュニケーションにおいて、オノマトペは不可欠であるとし、日本語学習者には早い段階でオノマトペを習得する必要があると主張している一方で、Hamano(1998)は、日本語学習者にとって、オノマトペの習得が難しいと指摘している。医療現場において、第二言語としての日本語オノマトペ(身体表現)の理解度がどのようになるか、そして、その習得に講じうる方策は何かを考察することが本研究の目的である。

本研究の対象は、インドネシア人日本語学習者・在日インドネシア人看護師・介護福祉士候補者である。そして、実験の刺激語として、守山(1994)が選出した61語の擬態語を用いて、アンケート形式で実施する。アンケートは3種類から構成される。1つ目は、オノマトペの評定課題に関するもので、この実験では、絵とオノマトペがマッチするかどうかの評定を行い、学習者にはオノマトペを学習するにはどのような手がかりを使うかを明確にして、今後の習得に講じうる方策を検討する。2つ目は、オノマトペ理解確認の実験であり、文書を読み、体のどこの部分の痛みを表現するかを推測させる。3つ目は、実験者自身の母語(ジャワ語)の身体表現の使用判断を行う。ジャワ語にも身体表現のオノマトペも存在しているが、現在のジャワ語母語におけるオノマトペの使用実態についても明らかにする。

主要参考文献

Hamano, S. 1998. *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Tokyo: Kurosio.

服部兼敏・東山弥生. 2010. 「看護における日本語オノマトペの意味」『看護研究』第43巻第4号, pp. 315-323.

Makino, S. and M. Tsutsui. 1994. *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*. Tokyo: The Japan Times, pp. 50-56.

守山恵子. 1994. 「医師経験留学生に対する擬態語教授語彙の選択について」『長崎大学外国人留学生指導センター年報』2, pp. 71-80.

1. 13:15～13:45

CLIL と英語プレゼンテーションについて

高橋強 (東海大学准教授)

長期にわたり小学校英語教育を研究してきた発表者は、2016年度東海大学湘南校舎において高大連携委員という役割を担い、小学校から大学までの英語教育の連携の重要性について議論を交わし、より一層の連携を強化していくという宣言がなされた。その中で、今回注目しているのが早期 CLIL 教育と小学校における英語プレゼンテーションについての役割とその重要性についてである。そこで東海大学附属静岡翔洋小学校での英語コミュニケーション能力育成と英語プレゼンテーションに特化した英語教育の取り組みについて発表したいと思っている。

上記した小学校は、最近注目されている CLIL 教育を低学年から取り入れ、実践的な英語コミュニケーション能力を育成することと併せて、早い段階から英語を話す、聞くといった、実践的なスキルを重視した英語教育を他の小学校より先駆けて導入し、実践している学校である。同時に社会や地理などの教科を CLIL 形式で授業に取り入れている。2016年6月に東海大学の高大連携委員会の打ち出した英語教育に関する3つの柱の実現へ向けて着実に英語教育を実践している小学校でもある。それによると2019年までに小学校においては卒業時までに英検ジュニアの Gold レベル合格者を90%以上にまで達成させることと TOEFL Primary の実施、さらに、CEFR の A1, A2 レベルの英語習得を目標として掲げており、現時点での報告と今後の展望について述べることとする。

また、授業を見学し、英語でのプレゼンテーションが重要性について、CLIL 教育の観点から考察し、小学校の児童が行った北海道への修学旅行についての英語プレゼンテーションを例にとり述べたいと思っています。また CLIL 教育による英語プレゼンテーションとはどのようなものなのか、またその準備について、教員と児童の取り組みについて、CLIL とインタラクションの関係、並びに CLIL 教育におけるメンターとしての教師の役割、家庭学習、英語プレゼンテーションに必要なスキルなどの観点から述べてみることにする。さらに附属小学校は、将来にわたり英語を駆使して社会に出て英語で円滑なコミュニケーションを図ることが出来るようにするための準備段階であると英語教育を位置づけており、実際の英語の授業実践で重視していることや、全国的に本学附属小学校の英語力のレベルがどの位置にあるのかについても同時に述べることにし、英語プレゼンテーションの効果はいかなるものであったのかについて考察し、例を示しながら発表していくことにする。

キーワード

CLIL (Content and Language Integrated Learning) (内容言語統合型学習)

小学校英語教育、英語プレゼンテーション

2. 13:50～14:20

Experimental Syntax を用いた日本語の語彙的使役動詞の生成メカニズムの検討

森友梨映(同志社大学大学院博士前期課程)

本研究の目的は、Hale and Keyser (1993) で提唱された L-syntax の実在性の立証を試み、日本語の語彙的使役動詞(他動詞)の分類と最適な生成のメカニズムを検討することである。

Hale and Keyser (1993) では、「lexicon の中でも語根を head とした統語操作が行われている」という仮説を提唱し、その lexicon 内での統語操作を従来の統語操作部門である syntax と区別して L-syntax としている。本研究では、Jacobsen (1992)、ナロック・プラシャント・影山・赤瀬川 (2015) の自他対応動詞の分類リストを基に、Cowart (1997)、Sprouse and Hornstein (2014) らの Experimental Syntax の手法を用いて、語彙的使役と統辞的使役の構文で含意された結果をどの程度までキャンセルすることができ(池上 1980-1981、佐藤 2005)、その客観的な容認度の差を検証する。その実験から、語彙的、統辞的使役文がどのように生成されているのか検証を行い、さらに、語彙的使役は語根の形態素によって生成のメカニズムが異なるのではないかという可能性を示唆する。

主要参考文献

- Cowart, Vayne. 1997. *Experimental Syntax: Applying Objective Methods to Sentence Judgements*. SAGE Publications.
- Halle, Kenneth and Samuel Jay Keiser. 1993. "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations," In *View from Building 20*, edited by Kenneth Halle and Samuel Jay Keiser. Massachusetts, MA: The MIT Press, pp. 111-176.
- Jacobsen, M. Wisely. 1992. "The transitive structure of events in Japanese", In *Studies in Japanese Linguistics I*. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Miyagawa, Shigeru. 1984. "Blocking and Japanese causatives," *Lingua* 64, pp. 177-207.
- パルデシ・プラシャント, 桐生和幸, ナロック・ハイコ. 2015. 『有対動詞の通言語的研究』東京:くろしお出版.
- 佐藤琢三. 2005. 『自動詞文と他動詞文の意味論』東京:笠間書院.
- Sprouse, Jon and Norbert Hornstein. 2014. *Experimental Syntax and Island Effect*. Cambridge: Cambridge University Press.

3. 14:25～14:55

日本語教育のすそ野を広げる

奥村訓代（高知大学教授）・公文素子（高知大学非常勤講師）

平成28年12月22日の28文科初第1271号に於いて、日本国憲法第26条【すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。】

がある中、「国民」を越えて【国籍その他の置かれている事情にかかわらず】（別添3,第3条基本理念第4項）の一文が明記されました。

また、平成29年3月14日には、日本語教育の充実を目指す超党派の日本語教育推進議員連盟の立法チームによる初めての会合が開かれ、日本で働く外国人や留学生が増えていることなどから、日本語を学ぶ体制を強化する必要があるとして、所管省庁を定めることなどを盛り込んだ法案の取りまとめに向け検討を始めることが確認されました。

それに日本語を教える指導者の育成など、教育水準を向上させることなどを盛り込んだ法案の骨子案が示され、本格的な検討を始めることが示されました。

これらは、今後の日本語教育に関して非常に明るいニュースの一つと言えるでしょうが、現実には、まだまだ基本的な問題が山積されています。例えば、それは、EPAによる看護師・介護士の受け入れにも見られますし、同じく2008年から始まった留学生30万人計画、また、昨今の防災対策における「やさしい日本語」の普及や定着の悪さにも容易に見受けられます。

これら最近の出来事を中心に、将来の日本語教育の方向性や、今後の課題を視野に入れながら「日本語教育のすそ野を広げる」取り組みに関して言及したいと考えています。

4. 15:10～15:40

「AとB」と「AとBと」の構造と意味に関する一考察

徐佩伶 (台湾淡江大学助理教授)

本発表では、日本語における「と」等位接続の構造について考察し、特に「AとB」のパターンと形が似ている「AとBと」のパターンの統語的・意味的な特徴を明らかにする。「AとB」のパターンを表す例を(1a)に、「AとBと」のパターンを表す例を(1b)に示す。

- (1) a. [バナナとみかん]を買った。
b. [バナナとみかんと]を買った。

Fukui and Sakai (2003) では「AとB」と「AとBと」は同じ構造をなし、後件の要素の「と」が省略可能だと主張している。しかし、その主張は妥当ではないことを次に示す(2)の例から分かる。「と」等位接続に「三本」「一袋」のような数量表現が入ると、「AとB」文と「AとBと」文の容認度が異なってくるのである。前者が容認できる文であるのに対し、後者は容認できない文である。この事実は、「AとB」と「AとBと」は同じ構造ではないことを示唆している。

- (2) a. [バナナを三本とみかんを一袋] 買った。
b. * [バナナを三本とみかんを一袋と] 買った。

また、等位節の中に、等位項が対称的でなければならないという要請がある。そのような対称性を示す例は(3a, b)である。ただし、それは構造的な要請によるのではなく、意味的な要請にもよるものだと本研究では示していく。

- (3) a. コーヒー二杯と紅茶二杯と、どちらがいいですか。
b. * コーヒー二杯と紅茶と、どちらがいいですか。

結論として、本発表では、「AとB」と「AとBと」は一見似たような文であるが、異なる構造を持つと考え、また等位構造において構造のほかに意味解釈にも対称性を求められていることも主張する。

参考文献

Fukui, Naoki & Sakai, Hiromu (2003) "The visibility guideline for functional categories: verb raising in Japanese and related issues," *Lingua* 113: 321-375.

5. 15:45～16:15

日本語構文意味論の可能性：モダリティとしての日本語受動構文

藤岡克則（大阪産業大学教授）

現代日本語における「モダリティ」に関しては、多数の研究者による様々な優れた研究が見られる。中でも、益岡隆志著『モダリティの文法』（1991：くろしお出版）は代表的な研究である。益岡は、その代表的な著作の16年後に、『日本語モダリティ探究』（2007：くろしお出版）を著し、前著で築き上げた研究成果に、新たな知見を展開している。

益岡のモダリティ研究の骨格をなすものとして、益岡（2007）は、以下の2つをあげている。

- (1) モダリティを文構成の中に位置づけること
- (2) モダリティの主観的な性格と線状化における特徴を構成的モダリティとして捉えること

これらのモダリティ研究の骨格は、日本語の文論研究の中でも特に重要な視点であり、そのことは日本語の文の意味と構造の解明に重要なヒントを与えてくれるものであると考えられる。特に、文の意味としての事態（あるいは命題）の領域と、その外形として表れる発話者の態度の領域を、文の意味的構成要素として捉えることにより、モダリティ要素が語順という線状化の中でどのような位置で生じるかという問題が、研究対象として顕現化することなどは、日本語の文の特性を考察するうえで重要であるといえる。

益岡は、命題としての個別領域（P2）が、一般事態の領域（P1）を包含し、判断のモダリティの領域（M1）が命題を包含し、発話のモダリティの領域（M2）がさらにそれらを包含するという以下のような階層的な構成関係を提示している。

[M2 [M1 [P2 [P1] P2] M1] M2]

益岡は、この階層的な文の意味的構成を、「文の意味的階層構造」と名づけ、この構造的視点を基盤として、研究を展開している。

本研究においては、益岡がモダリティ研究と、構文文法や文法化との類縁性を意識して提唱している「日本語構文意味論（Japanese Construction Semantics）」を基盤に、日本語受動構文を取り上げることにより、日本語構文意味論研究の可能性を検討することにある。「コト拡張」、「基性と派性」、「形式の分化」という3つのパースペクティブから、日本語受動構文を再考することにより、日本語受動構文が、モダリティの領域（M1）と命題としての領域（P2）との融合を生み出す構文の可能性があることを示唆したい。

6. 16:20～16:50

テモラウ文の意味機能に関する一考察

林青樺(台湾淡江大学副教授)

現代日本語におけるテモラウ文は、いわゆる命題に属しており、動詞で表される行為が主体(話し手)にとって望ましいもの、または感謝すべきものであることを表し、その行為を通して利益・恩恵を与えられるといった意味合いが含まれる表現として論じられてきた。

(1) わからないことがあったら先輩に教えてもらおう。

(2) 先生に論文をほめてもらった。

(1)(2)は話し手が二格の動作主から恩恵を受けており、命題の事柄を表すテモラウ文である。しかし、次の例文の示すように、命題以外の状況を表すテモラウ文も見られる。

(3) 〈配車センターに電話して〉タクシーを手配してもらいたいんですが。

(4) 京子さんの電話番号を教えてもらえますか。

(5) 私語が多い人は教室を出てもらうから、気をつけなさい。

(3)(4)は話し手が聞き手に行為を求める依頼表現であり、(5)は先生が学生に出した命令で、いずれも対人的モダリティを表すテモラウ文である。また、利益・恩恵の観点から見れば、従来の研究ではテモラウ文は主体(話し手)が二格の動作主から行為を受けるとともに利益・恩恵を与えられるとされてきたが、次の(6)(7)のように、主体が恩恵の受け手であると考えづらいつ場合もある。

(6) 大学生にもぜひ政治に関心を持ってもらいたい。

(7) こんな忙しい時期に急に辞めてもらっては困る。

このように、テモラウ文は意味・機能がかなり多様で複雑であり、命題のみならず、モダリティを表す場合もあるが、命題を表す典型的テモラウ文とそれ以外のテモラウ文との関係について論じる研究は、管見の限り見当たらなかった。そこで、本発表は、テモラウ文の用例を集め、命題を表すテモラウ文とモダリティを表すテモラウ文との相違に焦点を当てて、考察を行った。

その結果、命題を表すテモラウ文は主体(話し手)が二格の動作主から行為を受けるとともに利益・恩恵を与えられるのに対して、モダリティを表すテモラウ文として、可能表現や否定疑問文、「-たい」構文の形が多く使われ、それとともに機能が多様化し、利益・恩恵が主体でなく、二格の動作主((6)では「大学生」)に移行したり、逆に迷惑が及ぶという意味を表す((7)のように変わったりする場合も見られる、ということが明らかになった。

※宿泊について

ホテルはインターネットまたは電話で直接お申込みになるのが最も経済的です。5月20日(土)に静岡市で他に学会が開催されることから早めの部屋の確保をお願いいたします。

- ・ホテルアソシア静岡 静岡市葵区黒金町 56 054-254-4141
JR 静岡駅北口より徒歩 1 分
- ・ホテルガーデンスクエア静岡 静岡市葵区紺屋町 11-1 054-252-6500
JR 静岡駅北口より徒歩 5 分
- ・静岡北ワシントンホテルプラザ 静岡市葵区七間町 11-1 054-221-0111
JR 静岡駅北口より徒歩 10 分
- ・くれたけインプレミアム静岡駅前 静岡市葵区栄町 1-15 054-252-1111
JR 静岡駅北口より徒歩 3 分
- ・ホテルシティオ静岡 静岡市葵区伝馬町 1-2 054-253-1105
JR 静岡駅北口より徒歩 8 分
- ・ホテルセンチュリー静岡 静岡市駿河区南町 18-1 054-284-0111
JR 静岡駅南口より徒歩 1 分
- ・中島屋グランドホテル 静岡市葵区紺屋町 3-10 054-253-1151
JR 静岡駅北口より徒歩 10 分
- ・ホテルプリヴェ静岡ステーション 静岡市駿河区南町 8-5 054-281-7300
JR 静岡駅南口より徒歩 1 分
- ・静鉄ホテルプレジオ静岡駅北 静岡市葵区御幸町 11-6 054-252-2040
JR 静岡駅北口より徒歩 2 分
- ・静鉄ホテルプレジオ静岡駅南 静岡市駿河区南町 13-21 054-202-5000
JR 静岡駅南口より徒歩 2 分

※会場校（静岡県立大学草薙キャンパス）までのアクセス（まずは、JR 静岡駅へ）

航空機をご利用の場合、富士山静岡空港から JR 静岡駅に向けてバスに乗りしてください。所要時間 1 時間ほどで JR 静岡駅に着きます。

新幹線のこだまと一部のひかりが停車する JR 静岡駅から東海道本線で東京方面に向けて 2 駅 (7~8 分) の JR 草薙駅で降りてください。



静岡県立大学草薙キャンパス 〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田 52-1

※最寄り駅からのアクセス（徒歩またはタクシー）

J R東海道本線「草薙駅」南口（県大・美術館口）、または静岡鉄道「県立美術館前駅」、あるいは静岡鉄道「草薙駅」から 徒歩 15 分、あるいは草薙駅前からタクシーで 2~3 分で到着します。メーターは上がりず、初乗り料金です。（※バスの運行は平日のみです。）

※「J R草薙駅」、「静岡鉄道・草薙駅」または「静岡鉄道・県立美術館前駅」からの歩き方（以下の地図を参考にしてください）



アクセス方法 JR「草薙」駅、または静岡鉄道「草薙」駅から（静岡鉄道は②からスタート）

- ① JR草薙駅を出て、道路に沿って直進します。
- ② 静岡鉄道の踏切を渡って、直進します。
- ③ 地下道を通って大通りを渡ります。



- ④ 約 200m 進み、セブンイレブンのある交差点で左折します。
- ⑤ 約 200m 直進すると、レンガの建物が見えてくるので、そこで右折します。
- ★ 少し進むと左側に正門があります。



アクセス方法 静岡鉄道「県立美術館前」駅から

1 静岡鉄道県立美術館前駅を出て、線路と交差している道路を左折します。



2 大通りを渡り、直進します。



3 約 500m 直進すると、県立美術館の電光掲示板が見えるので、そこを左折します。

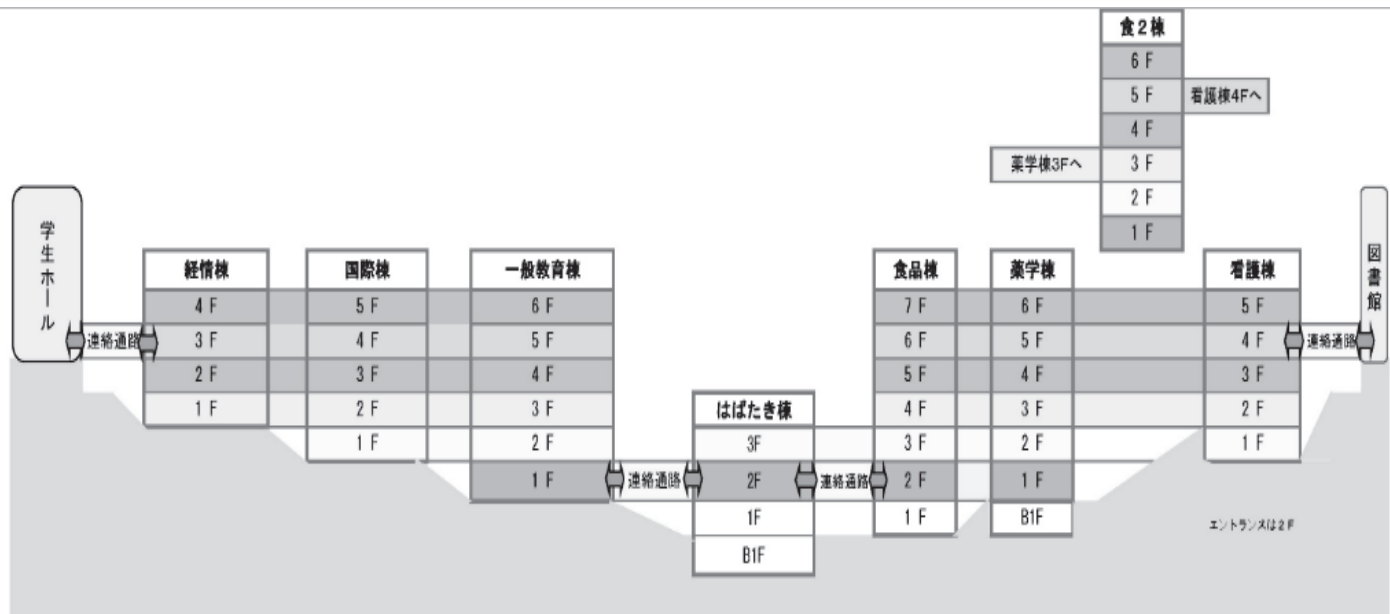


★ 約 300m 直進すると、右側に正門があります。



※静岡県立大学草薙キャンパスの正門から会場までの行き方

上の地図（草薙キャンパス全図。地図上で※印を付した看護学部のみ、草薙キャンパスと小鹿キャンパスを併用）の正門から入り、ユニバシティプラザを直進すると突き当りにコミュニティプラザ、（大・小）講堂、図書館、学生ホールがあります。受付は大講堂の中にあります。研究発表の会場である国際関係学部棟、経営情報学部棟と、学内食堂のあるはばたき棟は、ユニバシティプラザの左側（東側）になります。



学生ホール	経情棟	国際棟	一般教育棟	はばたき棟	食品棟	薬学棟	食2棟	看護棟
			国際コミュニケーション研究センター					静岡県立大学法人本部
客員教授室	地域経営研究センター 4314	3312 3313 3314 3315 3316 3317 3318	創業探索センター STUDIO 2309 2312	4F	5313	6329		「ふじのくに」みらい共有センター 13402 13407 13408 13409 13411 13412 13413 13414
売店 書店	4208 4209 4210 4211 4212 4213	SALL 3214 3215 3219	2215 2216 2217 2218	3F	5314 5319			男女共同参画推進センター 医療経営研究センター 13302 13311
食堂	4104 4105 4106 4107 4109 4110 4111	3104 3105 3106 3107 3108 3110 3113	健康支援センター 2103 2106 2107 2108 2109	2F	平学総合研究センター 5211 5216 5217 5112	6226		13215
				1F		模擬薬局 薬食研究推進センター 6128	12101 12109	
				B1F				

※会場内の移動方法

静岡県立大学草薙キャンパスの校舎は山の斜面に建てられています。正門→はばたき棟→一般教育棟→国際関係学部棟→経営情報学部棟→(大・小)講堂の順で斜面が高くなります。そこで会場内の異動は校舎のエレベーターを利用し、棟から棟への連絡通路を経由して、より高い棟へ行かれることをおすすめいたします。

※自家用車でのご来学いただいても駐車場の確保を保証できません。JR草薙駅前に民間等の有料駐車場がありますのでそちらを自己責任でご利用願います。

比較文化論 No.35

発行 2017年4月20日

日本比較文化学会事務局

〒574-8530 大阪府大東市中垣内 3-1-1

大阪産業大学国際学部国際学科

藤岡克則研究室内 日本比較文化学会事務局

日本比較文化学会第39回全国大会・2017年度国際学術大会準備委員会事務局

〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田 52-1

静岡県立大学草薙キャンパス

国際関係学部 澤田敬人研究室

電話：090-1984-3764

Email: sawada [at] u-shizuoka-ken.ac.jp

印刷

池田屋印刷株式会社

〒422-8058 静岡県静岡市駿河区中原 746-1

電話：054-285-8275
